
いつの間にか魔王様

深冬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

いつの間にか魔王様

【Nコード】

N3375K

【作者名】

深冬

【あらすじ】

代償は俺の生きてきた人生。

対価は魔王の命。

そして俺は生きる目的を得た。

俺が消えた日

俺の人生は平凡だった。

しかし、俺は天才だった。

生まれてからここまでで、全てが上手くいった。小学生の時のテストはほとんど満点だったし、走るのだって一番速かったからクラスで人気者だった。やること成す事全てが他人より上手く出来た。親からは期待の目で見られていたし、教師からは有名中学を受験するように薦められたりもした。

この頃からだっただろうか。俺は何のために生きているんだろうと疑問に思った。何もかもがわからなくなった。『どうして……どうして……』と自問自答を何度も繰り返した。

そして俺は壊れた。

それからの人生はずっと逃げてばかりだった。まずした事は、引きこもることだった。引きこもっていたら暇なことに気がついた。そこで、自分の部屋にあったパソコンで株取引を始めた。どうやら俺には株取引の才能があつたらしく、小学校卒業するころには預金通帳の数字がもう少しで9ケタに届きそうなくらいまで金を得た。

小学校の卒業式には当然のごとく出席はしなかった。親は、俺が学校に行かなくなったことに対しては、俺が株取引で稼いだ金の3割を渡すことで文句を言わなくなった。結局は子供より金なんだと思った。そんなことがあつたので俺は親のことを信用しなくなった。

中学生になると、株取引にも飽きてきた。預金通帳の数字は9ケタを突破したし、金を稼ぐ意味にも価値を見出だせなくなった。暇になった。

そこで俺は二次元の世界に逃げ込んだ。二次元の世界に入りこんでいると、暇では無くなったし、尚且つ、少しだけ心が奮えた気がした。

中学3年間は学校には行かずに、ずっと家で過ごした。でも、一応勉強はした。中学校の入学式の日には学校には行かずに本屋に向かった。そこで、中学生が習う範囲の参考書を全て買おうとしたが、あまりの量に持って帰れないことに気づき、やむを得ず帰宅した。しょうがないのでインターネットショッピングで全ての参考書を買った。

中学生を卒業する頃になると、俺は高校受験をするかどうかを悩んだ。俺は天才なので、参考書だけで有名高校に進学出来る学力を身につけていた。問題は他人とのコミュニケーション能力だけだった。『まあ、そこは何とかなるだろう』と思い、高校受験することにした。

俺は無事に家から近い偏差値が60くらいの高校に入学出来た。高校の入学式の日、俺は引きこもりをやめた。

問題の他人とのコミュニケーション能力だが、それは二次元キヤラの演技をすれば良いことに気がついた。この場面ならあのキヤラならこういう風に喋るだろうとか、こういう風に動くだろうとか、意外に楽しみながら出来た。

高校でもテストはほとんど満点だったが、体育は中学生の時に引きこもっていたので筋力が低下したので普通の成績くらいだった。

高校を卒業すると、また引きこもった。

どうやら、順風満帆な高校生活で疲れてしまったらしい。自身の体が怠け者だったことに気がついたついたが、そんなことはどうでも良かった。

それからは中学時代の引きこもりライフを2年近く続けた。俺が20歳になり、しばらくした時に父親がリストラされたらしい。それからというものの、両親が俺に媚びてきた。俺は飽きたとはいえず株取引をまだ少し続けていたので、金はあったので、親に二千万円を渡し、逃げるように家を出て、独り暮らしを始めた。

独り暮らしはとても楽だった。金の亡者の両親もいないし、なんといても二次元に没頭出来た。その頃には株取引を自動でやるソフトを開発していたので、勝手に金が入ってきていたので、金の心配だけはしませんでした。

そんな時、俺は何のために生きているんだろうという小学校の時に疑問に思ったことを思い出した。

今なら間違いなくこう答えられる。

——俺が生きている意味なんて無かったんだ。

俺の人生を振り返ってみたら、俺が意味なく生きてきたことがわかる。

ふと、鏡を見た。そこにはもう一人の俺が居た。そのもう一人の俺が喋り掛けてきた。

「お前は何がしたい？」

例えこれが夢だとしても幻覚だとしても叫ばずに、けれども力

強くこう答える。

「俺は意味のある人生を歩みたい。だが、この世界ではそれが出来ない。だから、せめてこの世界から消えたい」

「ならば、我がもとに来るが良い」

もう一人の俺はそう言うと、鏡の中から消えて、鏡が白く輝き出した。不思議なことにその輝きは眩しくなく、白く輝いていることだけがわかった。

そこを潜れということだろう。俺は迷わず輝く鏡の中を潜っていった。

その日、俺はこの世界から消えた……。

勇者の日々

「ふむ。めんどくさいことになったな」

今、俺は魔王城と呼ばれる禍々しい城の王座に座っている。

そして目の前には勇者一行と思われるきらびやかな剣や鎧を持った数人の男女。

本当にめんどくさいになった。

なんて世界は無情なんだ。

今から俺の世界から消えてからこれまでの人生を語ろうと思う。

そうだな、あの輝く鏡を潜った先は……

真っ白な空間だった。

地平線の彼方まで真っ白な空間。ここに長時間居たら心が壊れてしまいそうなくらいに何も無い空間だった。

そこで俺は神様に出会った。

容姿や体つきも憶えてはいない。おそらく神様が人間になんか認識できない存在だったんだろう。

ともかく真っ白な空間で俺は神様と契約を交わした。

俺の望みは生きる目的、生きる居場所、生きる糧だった。
他人にとってはこんなモノはどうでも良いと思うだろう。しかし、俺には必要だった。

一言に纏めると、生を実感することが俺の望みだ。

神様はならばと、俺に魔王を倒してきてくれと言ってきた。何でも神様が世界に直接介入することはできないらしい。

代償は俺の生きてきた人生。

対価は魔王の命。

そして俺は生きる目的を得た。

それからのことは簡単だ。

俺はある国に魔王を倒す勇者として召喚された。

俺を召喚したのは十代後半の国のお姫様だった。俺は彼女のことを姫と呼び、彼女は俺のことを勇者様と呼んだ。

俺を召喚した国についてはよく憶えていない。ハッキリ言って、俺にとってはどうでも良いことだった。

昔から俺はどうでも良いことに関して、ほとんど憶えようとしな

かったし、そのことを思いだそうとしても思いだせなかった。

かくして、俺は魔王を倒す旅に出た。

しかし、想定外なことに姫がついて来たのだった。何度も危険だから国に戻るように言っても、頑なに拒んで国には帰ろうとはしなかった。

旅に出て一ヶ月も経とうとした時に姫に何故国に帰えないのか聞いてみたことがあった。

姫が言うにはあの国がつまらないかららしい。

いつも護られている自分。

豪勢な生活をする自分。

ただただ、生きていることに飽きたとのこと。

そのことを聞いた俺は俺と似ているなと思った。

それからは姫に国に戻るように言わなくなった。

その代わり死んでも文句は言うなと言うようになった。

ああ。言い忘れてたが俺は神様に力を貰っていた。

強靱な肉体と圧倒的な身体能力。

この二つだ。

この二つの力を使い旅の先々の場所で魔族や魔獣といった魔王の配下どもを薙ぎ払った。

俺を恐れた魔王は、俺のもとに続々と配下を刺客として送ってきた。

だが俺は強かった。

魔族は魔法を使い俺を殺そうとしてきたが、俺の強靱な肉体に傷をつけることができなかったし、魔獣に至っては俺に触れることもできなかった。

俺はそんな魔族や魔獣に対し、ただ殴るだけで相手は潰れていったし、試しに手刀を使ってみたらスパツと、綺麗に切断できたりもした。

まあ、そんなこんなで旅を始めて一年も経とうとした時に魔王城に辿り着いた。

姫もこの一年で随分逞しくなった。旅を始めた時は自分が育ってきた豪勢な環境と旅の貧相な環境に戸惑いもあったが、今となっては大抵のことが一人でできるようになった。

俺は姫と一緒に魔王城に入っていくと、魔王の配下どもが襲ってきた。

いつも通りに姫が自身に何重にも防御魔法を展開し、俺は圧倒的な身体能力で敵を薙ぎ払う。

これが俺達の必勝パターンだ。

旅を始めた頃は姫も攻撃魔法で攻撃しようとしていたが、俺の圧倒的な身体能力と強靱な肉体を見て安心したのか、今では自分自身の守りを固めている。

俺もそれに文句は無いし、どちらかというと姫を気にかけることが無くなったので、戦い易くなって嬉しいくらいだ。

俺が敵を薙ぎ払っていると、いつの間にか魔王の配下どもがいなくなっていた。どうやら、殲滅したみたいだ。

そのまま俺達は魔王のもとに歩いて行った。

魔王の玉座に辿り着くと魔王がいた。

一目で分かるくらいに禍々しく強そうな風格を持っていた。

俺は試しとばかりに五割くらいの力で魔王の頭を殴り付けた。

そしたら魔王の頭が吹き飛んだ。

俺も姫も啞然とした。

俺はともかく姫の驚きようといったら凄かった。それもその筈。
今で自分達人間を苦しめてきた魔王が一発殴っただけで死んだのだ。

姫は少し頭を整理してきますと言って、魔王城にあった寝室に引き込もってしまった。

それからというものの、俺の一日はずっと魔王城の玉座に座ってボ
ーッとすることの繰り返しだった。

新生魔王軍

俺が王座に座ってボーツとすること約一ヶ月。いや、正確な日数は数えて無いからよくわからんけど、魔王城に勇者一行がやって来た。

何故、勇者一行だと分かったかというところ開口一番にこう言ってきた。

「お前が魔王だな。我が剣でお前を倒してやる！」

こんな風に言ってきたからだ。

いくら馬鹿な奴でもこんな言葉を言う奴は勇者しかいないと分かる筈で、周りにいる奴等はおそらく勇者のお供という訳だ。

「ふむ。めんどくさいことになったな」

ま、これまでを語るとこんな感じだな。

俺が心の中で誰かに語っていると、勇者一行が疲れていた。勇者は剣を支えにして、ようやく立っているといった感じだ。

他のお供達も膝を着き疲れているように見える。

「この化け物めが！」

勇者がそう叫ぶと勇者一行は逃げるように魔王城をあとにした。

俺が頭の上にハテナマークをたくさん作っていると、姫が部屋の隅から出てきた。

「彼らは勇者様に向かって攻撃してたんですよ。その証拠に周りをよく見渡してください」

姫にそう言われたので周りを見渡してみると、俺の周りが半壊していた。座ってた王座は背もたれが吹き飛び、辺りの床は陥没していたほどだ。

「まったく、ボーツとして周りをよく見ないのは勇者様の悪いところですよ」

「ああ、悪いな。ついでに聞くが、何でアイツらは逃げたんだ？」

「それすらも分かってなかったんですか……」

姫は呆れたように呟いた。

「いくら攻撃してもダメージを与えられない勇者様を恐れて逃げていったんですよ。お分かりになりましたか？」

「攻撃されてたのか。気づかなかったわ」

「本当に勇者様は……」

姫が冷たい視線を送ってきた。
お返しとばかりに姫を観察してみることにした。腰まで流れる水

色の髪をポニーテールにしている。目は少しキツイが顔立ちは良く、さすがお姫様つてところだ。

姫を観察していると、姫は顔を紅くした。

「そ、それよりもこれからどうするんですか？」

「どうするとは？」

「さっきの連中はおそらく私達とは違う国の勇者ですよ。その勇者に勇者様は魔王つて勘違いされたんですよ！」

「なるほどね。だったら、俺が魔王で良いよ」

どうせ、これからは暇になる。神様に与えられた生きる目的は魔王を倒すこと。

それが終わってしまったのでやる事が無くなった。

だったら、俺が新しい魔王になろう。

契約は終了したんだから少しでも楽しそうな道を歩んでも良いよな神様？

「姫は俺と一緒に歩いてくれるか？」

悲しい告白だった。

今まで一緒にいた姫だからこそ一緒にいたかった。断れたら姫を殺さなくてはならなかった。

姫の答えるまでの数秒が何時間にも思えた。

「喜んでお供させて頂きます。魔王様……？」

その日、新たなる魔王軍が誕生した。

強靱な肉体と圧倒的な身体能力を持った魔王。
いつも魔王の側に仕える元一国のお姫様。

そんな二人だけの魔王軍。

新たなる魔王軍が誕生してから半年後、新たなる魔王を勇者として召喚してしまった国は国民が奮起し、王家が断絶した。

そんなことを知らない魔王は困っていた。

「なあ、姫。これはどうすれば良いんだ？」

「それは魔王様が決めることです。魔王軍に引き入れるのもよし、気に食わないからと言って殺すのもよしです」

「はあ……」

魔王が溜め息をつきたくなるのも分かる。魔王の目の前には人間の女と魔族の男がいた。

彼らは魔王軍に入りたいらしい。

魔王としては自身と姫の二人だけで他に魔王軍を増やす予定も無かったし、構想も無かった。

「とりあえず右の奴から自己紹介しろ」

人間の方から促す。

「はい、私はセリナ・ロン・アーキュリーと言います。とある国に仕えていましたが、魔王様の強さを聞き、ここまでやって来ました」

彼女は騎士の格好をしており、端正な顔立ちで長い黒髪が特徴的だった。

「あ、そう。お前はこれから黒騎士と名乗れ」

「ハッ！」

黒騎士は膝を着き最敬礼をした。

「で、そちらさんは？」

俺はもう一人の白い髪の魔族の男に問いかける。

「……オレに名は無い。種族はエルフだ」

「じゃあ、お前は白魔^{はくま}ね」

「……了解した」

名前に関しては適当だ。名前を覚えるのが面倒だから新しくつけたに過ぎない。

「さて、たった四人の魔王軍はどこまでいけるのかな……」

俺は呟く。

所詮は暇潰しなのだ。この魔王軍でどこまでできるか楽しみだ。

黒騎士の力

魔王はいつも通り玉座に鎮座し、ボーッとしていた。

「魔王様！」

その声は魔王軍のメンバーが増えた翌日の朝にこの玉座の間に響き渡った。

「なんだ、騒々しい」

「魔王様の实力を確認したいのですが、お付き合いお願い致します」

そうやってきたのは黒騎士だ。

確かに、新規メンバーは俺の实力を風の噂しか知らないだろう。

というか、白魔が魔王軍に来た理由は知らないが、黒騎士は俺の实力をその風の噂程度を聞いてやって来たらしい。

それって可笑しくないだろうか？

勇者一行が俺に恐れを抱いて逃げ去っていつてから、新規メンバーが来るまでの半年間俺がしたことといえば、魔王城にやって来た魔王討伐軍や勇者一行の撃退くらいだ。

アイツらの相手が面倒だったから、見せしめに数人を血祭りにあげたんだ。そうすると大抵は逃げ去っていくからな。中には数人残る時もあるが、そいつらは直ぐに血祭り決定だったし。

（ああ、なるほど。逃げ去った連中が噂を流したのか。それでどん

どん尾ヒレがついてってオチだな。うんうん。そうだ、そうだ。俺って頭良いな。」

「ああ、良いぞ。先に中庭に行って待っててくれ」

「ハッ！」

黒騎士はそう言いつと、騎士らしく毅然な歩き方で中庭に向かって行った。

「よろしいのですか魔王様？」

魔王の傍らに控えていた姫が喋りかけてきた。

「別に良いよ。とりあえずは戦力の確認っていう名目だから」

「でしたら、白魔さんも中庭に呼んでおきますね。白魔さんにも魔王様の实力を知って頂かないといけませんし」

「ああ、ありがとう。まったく姫は気が利くな。あと、昼飯の用意もしておいてくれ」

「ふふふ……。わかりました。では、お氣をつけて」

魔王は姫に昼飯の支度を頼むと、王座に腰掛けていた重い腰を上げ、中庭に向かうのであった。

「さて、ルールを決めようか」

ところ変わって中庭。

魔王と黒騎士は対峙していた。

「ルールですか？」

「ああ、ルールだ。俺に傷一つでも着けたら黒騎士の勝ちだ。どうだ？」

「わかりました。では……行きます!!」

黒騎士が魔王に向かって走りだした。速度は人間の限界を越える速さで、魔王は『本当に黒騎士は人間か?』などと思った。

黒騎士は魔王の目の前にたどり着くと、腰に差していた西洋剣で横一闪。

魔王はそれを後ろに重心を傾けることで難なくかわす。

しかし、黒騎士の猛攻は続く。西洋剣が縦横無尽に走りまわる。魔王はそれも難なく避ける。

「クッ……」

次第に黒騎士の顔が焦りの色を帯びてくる。

魔王としては、黒騎士の攻撃を受けても良いのだ。魔王の強靱な肉体があれば黒騎士の攻撃では傷一つ着かない。

しかし、魔王は避け続ける。それは勿論、黒騎士の実力を見るた

めだ。

これから先、魔王城には無限に等しいくらいの人間や魔族が押し掛けて来るだろう。ただ、押し掛けて来るならば良いのだが、彼らは魔王の命を狙っているのだ。

その中で黒騎士は生きていくだけの力はあるだろうか？

確かに黒騎士は強かった。

ハッキリ言って、人間の限界を越えている。だが、千の軍勢が現れたら確実に死ぬだろう。

魔王城にいるということは最低でも魔王相手に傷一つ着けられるようでないとい心許ない。

「どうした？　これが黒騎士の限界か？」

だから、少し手助けをしてあげる。

これでダメだったら、黒騎士を殺そうと思いつながら。

黒騎士の眼が俺を射ぬく。

最早、声を出す体力も残っていないのだろう。それもその筈、魔王が黒騎士の攻撃を避け続けて約1時間だ。

その間、黒騎士は全力で魔王に向かって西洋剣を振り抜いていた。

いくら、黒騎士が人間の限界を越えているからとはいえ1時間もの間全力を出し続けるのはとてもなく体力を消費することになった。

「さあ、来い」

黒騎士が走り出す。それは今日の中で一番の速度だった。

一番初めの様に横一閃。何もかも動作が同じだった。しかし、一つだけ違うモノがあった。それは西洋剣に電気が絡みついていったことだった。

魔王も一番初めの様にかわした。しかし、西洋剣に絡みついた電気が西洋剣の先端に集まり西洋剣の長さを伸ばした。

黒騎士は手に確かに切った感触があったことに喜び、剣を振り抜きながら気絶した。

白魔の魔法

魔王の目の前には黒騎士が倒れている。

魔王はそれを一瞥していつの間にか傍らにいた姫に喋りかける。

「あー、腹減った。姫、昼飯の用意は出来てるか？」

「はい、出来てます。それよりも黒騎士さんは限界を越えられませんでしたね」

この世界では魔法は基本的に魔族しか使えない。

例外として人間の中にも魔法を使える者もいる。それが各国の王族だ。何故、王族が魔法を使える理由はわからないが、そういうことになっている。

しかし、例外の中にも例外があった。

王族で無くても、人間が限界を越えると稀に魔法を使えるようになる。これは余りにも成功率が低く、人間達の中から忘れ去られていた。

そんな忘れ去られた可能性を黒騎士は成功させたのだ。

「とりあえず合格だな。ああ、白魔。昼飯食べたら次はお前だからな」

「……了解した」

「よし、昼飯だー。……と、まずは黒騎士をベッドに運ばないと」

魔王は黒騎士を優しく抱き抱える。

「二人とも、先食べててくれ」

魔王は姫と白魔に昼御飯を先に食べておくように言うておいて、黒騎士を彼女の寝室に連れていく。

「……うん」

黒騎士は寝室に連れていく途中で目覚めた。

「お、起きたか」

「あの、私は……」

「黒騎士は魔法を使っただ。よく頑張ったな」

「私が魔法を……」

黒騎士が驚愕を顔に浮かべている。

「ああ。疲れただろ？　だから、今は眠っておけ」

そう言った頃には黒騎士の寝室に辿り着いた。

「はい……」

黒騎士はそういつと再び気絶した。

幸いなことに寝室の扉開いてあった。おそらく姫が気を配ってくれたのだろう。

寝室に入り、抱き抱えていた黒騎士をベッドに横たわらせる。

「おやすみ」

魔王はそう言いながら黒騎士の頭を撫でる。

「じゃあな」

そう言つと、黒騎士の頭からそつと手を離し、ゆっくりとした動作で寝室を後にした。

「さて、次は白魔の番だな」

昼御飯も食べ終わり、魔王の声が食堂に響く。

「白魔はどうやって俺に実力を見せるんだ？」

「……オレの魔法を見てもらう。それだけだ」

「じゃあ、また中庭に行くか。姫も来るか？」

「いえ、私は別にやることがあるので」

姫はそう言つとそそくさとどこかへ行つてしまった。

「じゃあ、俺らも行くか」

魔王は中庭に向かい歩き出した。白魔は背後霊のように魔王に着いて行く。

中庭まではさして遠くもなく、歩くこと二、三分で着いた。

「で、どういう風に見せてくれるんだ？」

魔王がそう言つと、白魔はゆっくりと右手を開き空に掲げた。

すると、右手から小さな火の玉が生まれた。その小さな火の玉は辺りの空間を貪り喰らうようにメラメラと肥大していった。

やがて、直径五メートルにも届くかのように達した時、白魔はその右手にある最早巨大と形容する程の火の玉を上空に打ち上げる。

巨大な火の玉は上空五十メートル程で空中に固定されたかのように停まつた。白魔はすかさず左手に小さな火の玉を作り出すと、上空にある巨大な火の玉に向かって打ち上げた。

小さな火の玉は巨大な火の玉に当たると巨大な火の玉は風船のように破裂し、魔王城の周辺に火の雨を降らせた。

「へえ、凄いじゃん。これで全力か？」

魔王は顔に驚きの表情を造ると白魔に問うた。

「……五割といったところだ。」

「なら、まだ威力は上がるのね。とりあえずは合格だ。白魔の過去や経歴は聞かないから存分に俺のために働いてくれ」

「……了解した」

「ああ、それと黒騎士の魔法を教えてやってくれないか？ 俺って魔王の癖に魔法使えないんだよね」

魔王がハハハッと笑うと今度は白魔が驚いた。

「ま、それでも白魔よりは強いから安心しろ。てか、さっきの黒騎士との決闘紛いの練習？ 見たよな。あれで白魔に俺の実力は伝わってると思うてるけど、今から俺と闘ってみるか？」

「……いや、遠慮しておく」

「うーん、久しぶりに身体を動かせると思ったんだがな。それで、黒騎士に魔法を教えてくれるのか？」

「……一応教えてみるが、大成するかは保証出来ん」

「ああ、分かってるよ。俺は昼寝するから夜飯の時間になったら起こしてくれよ」

魔王は返事も聞かずにその場を立ち去った。

黒騎士鍛練中

あれから一週間。

現在、中庭では黒騎士が魔法を扱う鍛練をしている。やはり魔法のことは魔族に聞くべしと言うことで、講師には白魔を付けている。

一応、姫も魔法を使えるが、魔王の勇者時代に共に旅したことで防御魔法に特化してしまった。

黒騎士としては攻撃魔法を学びたいらしく、白魔に師事している。

一方、そんな魔法を扱う鍛練を中庭の隅で見ている影が二つあった。

「暇なんですけど」

「でしたら、黒騎士さんの鍛練に付き合ったらどうですか？魔法については教えられませんが、実戦訓練なら出来る筈です」

「めんどくさいわ」

言わずと知れた魔王と姫である。

彼らはほぼ毎日、中庭で黒騎士の鍛練を眺めていた。この掛け合いも一日五度はしている程だ。

現在、黒騎士がしているのは魔法で剣を生成することだ。

それさえ出来れば、戦場で魔力が尽きない限り武器の喪失という、騎士にとってのマイナスには繋がらない。それに剣と言っても魔力を押し固めた魔力剣であるから自由に長さを変えることが出来るし、

押し固める魔力の属性によっては威力も変わってくるので戦術の幅が広がる。

現在、黒騎士が扱える魔法属性は雷だけだ。

それは一週間程前に魔王に相手に限界まで闘い、その時に発現した初めての属性であり、黒騎士にとってはもつとも相性が良かった属性になる。

魔力剣を生成するにあつての鍛練は簡単だ。

初めに黒騎士が元々持っていた剣に魔力を絡みつかせることから始まる。これは魔力を剣の形に押し固める上での、外殻を造ることにあたる。

これが出来たら今度は魔力のみで剣を生成するだけだ。

目の前で黒騎士は、なんとか魔力のみで剣を生成出来るが、魔力を押し固めることが不十分で直ぐに魔力が霧散してしまっている。

「仕方ない。少し手伝ってくる」

魔王はやれやれといった顔で、黒騎士の鍛練に付き合っている白魔のもとに向かう。その背後からは行つてらっしゃいませという声が聞こえた。

「どうだ、白魔？ 魔力剣の維持時間はどんなもんだ？」

「……三十秒といったところだ」

「まだそんなもんか。これは荒療治が必要だな」

魔力の塊を維持するには単純に努力が必要だ。

何度も何度も同じ動作をして憶えるしかない。これは日々の鍛練の中で突き詰めていくしか無いのだが、それよりも実戦の中で無理矢理身体に憶え込ませる方が効率が良い。

しかし、これにはアクシデントが多い。いきなり魔力が霧散してしまうことで怪我をしたり、魔力操作が未熟なために実戦相手が怪我をしてしまったと言う話が多い程だ。

そのことが理由でこの鍛練方法を使う者は少ない。

しかし、魔王相手ならこの方法が最も有効である。魔王の強靱な肉体があれば、魔王が怪我をすることも無く、魔王が攻撃をしなければ黒騎士も怪我する心配は無い。

「黒騎士、ちょっと良いか？」

「は、はい！ 何でしょう魔王様？」

黒騎士は少し息を切らせていたが、まだまだ大丈夫そうだ。

「これから俺と模擬戦をしてもらおう」

「何故ですか？」

どうやら黒騎士は模擬戦をする意味を分かってないようだ。

ま、それもそうかと魔王は溜め息をついてから、かなり省略して説明する。

「そっちの方が地道に鍛練するより伸びるからだよ。とりあえず魔法剣のみでかかってこい」

黒騎士はわかりましたと呟いてから魔法剣を生成する。見たところ魔法剣の生成時間は二秒といったところだ。

生成に二秒、維持は三十秒。これでは、とてもじゃないが実戦では役に立たない。これからの伸びに期待するしかないだろう。

雷属性の魔力剣を生成した黒騎士は一直線に魔王に向かって駆け出す。

黒騎士が魔王の目の前まで到達すると、前回と同じように横一線。魔王の方も前回と同じように重心移動だけで回避しようとしたが、魔力剣が横一線と同時に伸びたように見えたので、咄嗟に右腕で受け止める。

どうやら、魔力剣の生成時間や維持時間はそれほどでも無いが、魔力剣の形状操作はなかなかのモノのようだ。

黒騎士は雷属性を付加した魔力剣を受けたのにも関わらず感電しない魔王に一瞬驚くが、魔王様だからと言う理由で即座に魔力剣と右腕との力比べを諦めて後方に跳ぶ。

そこで魔力剣を大剣の形状にし、おもいつきり魔王に向かって薙ぐ。

「はああああ!!」

しかし、それも魔王の右腕によって受け止められた。

魔王は大剣まで出来るのか感心しながらも、左拳で黒騎士の腹を軽く殴りつける。それでも威力は十分で黒騎士は吹き飛ばされる。

「クッ……」

だが、黒騎士は気合いでなんとか倒れずにすみ、すぐさま反撃のため体制を立て直す。

そして再度魔王に向かって駆け出し斬りかかる。しかし、維持時間がきてしまったのか斬りかかっている途中で魔力剣が霧散してしまった。

「なっ……」

黒騎士は言葉を失った。

「残念だったな」

そう言つて、魔王はもう一度黒騎士の腹を殴りつけて吹き飛ばす。今回は気合いだけではなんとかならず、黒騎士は倒れてしまった。

「どうした？　黒騎士はそんなもんだったのか？」

黒騎士はその言葉を聞き、無理矢理立ち上がり、魔力剣を再び生成した。

勇者の置き土産

なんだかんだで一週間の時が過ぎた。

その中に変わったことがあったとすれば魔王の日課くらいだ。

午前中に黒騎士に付き合い実戦訓練をしてやっている。午後は毎度のことながら王座に腰を据えてポーツとしている。

そんな日がいっまでも続くと思ってた魔王は予期せぬ闖入者に眉を潜めていた。

「なんだまた来たのか。懲りない奴らだな」

「う、うるさい！ 貴様さえ死ねば、俺様は国に帰って豪遊出来るんだ！」

予期せぬ闖入者とは以前は“勇者”だった“魔王”を魔王と間違えて広めた勇者一行である。

「なあ、姫。なんでコイツらはここまで来れたんだ？ 姫なら城に入られる前に気づけたんじゃないか？」

「確かに気づいていましたが、然したる脅威でも無いので、常日頃暇だと呟いている魔王様のために無視しました」

「おい！ その女！ 俺様が然したる脅威も無いとはどういうことだ！」

勇者が心外とばかりに姫に対して喚き散らす。

「以前、魔王様に恐れをなして逃げ帰ったのはどのどいつでしたっけ？」

「だ、黙れ！　アレス、あの女をやっちまえ！」

勇者は姫の鳩尾を抉るような鋭い言葉の前に返す言葉は無くして、仕方なしとばかりに武力行使に打ってでた。

「は、はい」

アレスと呼ばれた少女は魔法を使えるらしく、素早く呪文を唱え空中に鋭く尖った氷の塊を十個ほど生み出し、それを申し訳なさそうに姫に向かって射出した。

魔法使えるということは王族なのであろう。

姫はというと自身の周りに結界を発生させ氷の塊から身を守った。氷の塊が結界に弾かれて魔王に5個ほどぶつかったのはご愛敬だ。

「アレス！　何してるんだ！」

「す、すみません……」

勇者がアレスに対して当たり散らす。

「本当に最低な勇者ですね。私の知ってる勇者は仲間に対して優しい人でしたよ」

そう言って、姫は魔王をチラリと見た。

「魔王様。あの勇者はウザイので排除してもいいですか？」

「お、おう……」

姫のイライラが伝わってきたのか珍しく魔王はたじろいだ。

姫はそれを了承と受け取ったのか、呪文を唱える。姫にしては呪文を唱えているので強力な魔法ということだ。

「な、なにをしている……」

勇者は姫が自分に対して何かしようとしているのを感じとって身構える。

十秒ほどで呪文は完成した。すると、勇者の足下に魔方陣が浮かび上がってきて、一瞬にして勇者の体が消えた。

「へえ、姫って転移まで使えたんだな」

状況を飲み込めていなかった勇者抜きの勇者一行のために魔王は状況が分かりやすいように言葉を発してあげた。

こちら辺が“元”勇者の“現”魔王の優しいところなのであろう。

やがて勇者抜きの勇者一行は状況を飲み込めたのか、一目散に逃げ去って行った。

しかし、アレスと呼ばれた少女だけは逃げられなかった。姫が魔法で動けないようにしたからである。

「魔王様。この少女を魔王軍に入れても良いですか？」

姫は珍しく自分から頼みごとを言ってきた。

「どうしてだ？」

「いえ、魔王城が広すぎて家事を行うのに雑用が欲しいと思いついて。それに魔法を使えるようなので自衛も出来る筈です」

「なるほどな。それなら良いかもな。で、名前はとうする？」

「それは魔王様が決めることです」

「だよな」

アレスは会話に着いて来れなかったのか、頭にハテナマークを浮かべ、自分の身に起きている災難を理解出来ていないようだ。

「じゃあ……、今からお前の名前はメイドだ！　これからメイドと名乗るように」

魔王はアレス……もといメイドに向かって指を差す。

「え……、どういことですか？　ワタシはどうなるんですか？　ワタシはどうしちゃったんですかー！」

魔王城にメイドの声が響き渡ったのか、中庭にいる筈の黒騎士と白魔が息も絶え絶えに王座の間にやってきた。

「魔王様！」

「……どうした？」

「おう二人とも。いいところに来た。コイツは新しく魔王軍に入ったメイドだ。主に雑用をしてくれるそうだ。こき使ってやってくれ」

「噓おおおおお！！！！！！！！」

ようやくメイドは状況を理解したのか再度魔王城に響き渡るような叫び声をあげた。

メイドの一日・午前

メイドの一日はたった一つの罵声から始まる。

「早く起きなさい！」

「う……うん………」

メイドが与えられたベッドですやすや眠っていると姫の声で目を覚まさせられた。

「……おはようございます」

メイドは眠り眼ながらもきちんと姫に朝の挨拶をする。

「おはようございますは良いからシャンとしなさい」

姫はそう言つてメイドに向かつて手に持っていた桶の中に入っていた水をぶちまける。

どうやら姫はとことん部下に対しては厳しいようだ。

「目は覚めましたか？」

「は、はい……」

メイドは自分の置かれている状況を思い出し、沈んだように返事をする。

（夢じゃなかったのか……）

メイドの置かれている状況とは、今まで敵対していた筈の魔王軍に強制的に入れさせられたのだ。

そのことは別に良い。あのまま勇者についていても良くないことが起きていた筈だからである。

しかし、魔王軍の中の待遇が悪かったのである。どうやら、メイドは雑用としてこき使われるようだ。

「はあ……」

思わず溜め息が出た。

まずメイドが命じられたのは中庭の掃除である。

メイドが竹箒を持って中庭に行くと、中庭は散々の状態であった。ところどころに大小様々なクレーターのような穴が出来ているのだ。

「私が朝食を作っている間、穴を埋めておきなさい」

姫はさりとそう言って、朝食作りのために魔王城の中に消えていった。

「どうしたら良いんでしょうか……」

そう呟きながらも、元来真面目な性格なのかメイドは中庭の隅に

あつたスコップで穴を埋め始める。

しばらく穴を埋める作業を続けていると、長い黒髪綺麗な女性が中庭にやって来た。

「あ、おはようございます」

「ああ、おはよう。そういえば、まだ自己紹介をしていなかったな。黒騎士だ。よろしく」

黒騎士が右手を出して自己紹介をしてきたので、メイド急いで黒騎士の手を取り緊張した面持ちで自己紹介を始める。

「ええと、アレス……じゃなかった。メ、メイドです。よよよ、よろしく願います」

「ところで君は何をしているのかな？」

「ワタシはあの穴を埋めているんです」

メイドは穴に向かって指を差し、頑張りますと意気込みを語った。

「そ、そうか……。ならば私も手伝おう。なに、鍛練にもなるから気にするな」

黒騎士はそう言って、ハハハッと渴いた笑い声を出した。

そう、あの穴を開けたのは黒騎士である。魔王との実戦訓練の時に殴り飛ばされて開いた穴だったり、魔力剣の制御を誤って開いた穴なのだ。

前者の理由は魔王にも責任があるのだが、黒騎士は自分が未熟なためと思っており、自分の責任にしている。

「ありがとうございます」

メイドは純粹無垢な満面の笑みで黒騎士に対してお礼を述べた。その笑顔で黒騎士の精神にダメージを与えたのは言うまでもない話である。

黒騎士と一緒に穴を埋める作業を一時間くらいすると、朝食の準備を終えた姫がやって来た。

「貴女達は何をやっているんですか？」

「何って姫様の言い付け通り、穴を埋めているんですよ」

エヘへと、笑いながらメイドは姫の質問に答えた。

「私は鍛練のために手伝っているところだ」

黒騎士は鍛練という言葉を強調して返答する。

「はあ……」

姫は溜め息をつき、こうするんですよと、魔法を使った。すると、みるみる穴は塞がっていき、中庭は多少の凸凹はあるものの平らに

なった。

メイドと黒騎士は驚きのあまり、開いた口が塞がらなかった。

「たしか、貴女達って魔法を使えた筈ですよね？」

その言葉が止めのように二人に突き刺さった。

「すいません……」

「面目無い……」

二人は口々に謝罪の言葉を出した。

「仕方ないですね。では、貴女達は汚いので先にお風呂に入ってください。それから朝食を食べに来なさい」

それから二人は仲良くお風呂に入った。

これから朝食ということもあり、シャワーだけ浴びた。

風呂場では、互いに何故魔法を使えるのが疑問に思っていたらしく、その理由を教えあった。

黒騎士はメイドが王族であったことに驚き、メイドは黒騎士の魔法獲得のために行った方法に対して驚いた。

これはまだ午前中であり、慌ただしいメイドの一日の始まりであ

29.

メイドの一日・午後

「なあ君。これから城の案内をしたあげるけど、どうする？」

朝食も終わり和やかな空気の中、黒騎士がメイドに提案する。

「え、あ、おねがい——」

「いけません」

メイドが了承の言葉を言おうとすると、横から姫の言葉が響いた。

「メイドには私と一緒に城内の掃除をしてもらいます。それに、黒騎士さんは魔法の鍛練がある筈です。白魔さんから及第点は貰えましたかな？」

「うつ……」

黒騎士は苦虫を噛んだように顔を歪める。及第点とは魔力剣の生成に○・一秒、維持に一時間というモノだ。

今現在の黒騎士は生成に○・五秒、維持に四十三分と、及第点を越えていない。

「黒騎士さんは魔王様と実戦訓練でもしていてください。行きますよ、メイド」

「え？ あ、はい……」

姫はメイドの首根っこを掴んで食堂を後にした。

「やれやれ。じゃあ、俺達も行くのか」

今まで沈黙を保っていた魔王はやつと言葉を発し、黒騎士と白魔を引き連れいつもの中庭に向かった。

「まずはここからです」

初めに掃除をするのは玄関らしい。ただし、玄関と言っても、魔王城の玄関はだっ広い。それを隅から隅まで掃除をすることを思い、メイドは静かに落胆した。

「あなたは床を綺麗にしてください」

姫はそう言って、自身は置物を磨き始めた。

「あ、はい。頑張ります!」

「返事はいらないので早く掃除始めてください」

「は、はい……」

メイドは持つてきておいた箒で床を掃き始める。

三十分後、メイドは一通り床を掃き終わったので、姫に報告をすることにした。

「姫様。床、掃き終わりました」

姫は無言で床を見渡す。そして、人差し指を床に這わせて、メイドに人差し指を見せてくる。

「まだ、こんなにも埃があるのに終わったの言いますか？」

そして姫はニツコリ微笑みかけた。

「ヒツ……！」

姫の後ろに何か得体の知れないモノを感じたのか、メイドは顔を引き吊らせた。

「す、すいません！　今すぐ掃き直します……！」

メイドはぎこちなく回れ右をして姫を自分の視界から外すと、急いで床を掃き直し始めた。

「やっと、終わりました……」

メイドはそう言つて、自分で掃除をした床に倒れ込む。それもその筈である。今度は、埃を気にしながら丁寧に丁寧に床を掃いて、それでも床に埃が着いていたので、雑巾で水拭きまでしたのだ。

メイドのその様子に気づいたのか、姫がやって来た。

「本当にやっつとですね。それと、今何時かわかりますか？」

「えっと、午後五時です……」

「掃除を始めたのは何時でしたっけ？」

「午前十時です……」

「なにか言いたいことはありませんか？」

「……ごめんなさい」

メイドは時間を掛けすぎてしまったと、謝る。

「まったく、これも魔法を使えばすぐだというのに」

「あつ……」

考えもしなかった方法を言われてメイドは驚いた。確かに、魔法で水を操ればすぐ終わったのだ。人間は魔法を使える者が王族くらいなモノで、そんな使い方をする者は居ず、メイドは考えつかなかったのだ。

「午前中の穴埋めから何も学ばなかったんですか？　魔法は便利なのですよ」

「勉強になりました……」

「今日は敢えて何も言わなかったですが、何か困ったことがあったら魔法を使つて解決できないか？　と、一度は考えなさい。わかりましたか？」

「は、はい！」

メイドは姫が自分のためを思つて試練を与えてくれたんだと感動した。

「あと、その柱の影に隠れている人もよく憶えておいってくださいね」

メイドは姫の言つた言葉がよくわからなかったが、柱の方をみると、黒い髪が見えたような気がした。

「それでは夕飯の支度をします。手伝ってください」

姫はそう言つて、スタスタと厨房の方へ歩いて行つてしまった。

「ま、待つてくださいーい！！」

メイドは慌てて姫の後ろ姿を追つた。

メイドの一日・終幕

あの掃除の後、夕飯の支度を姫と一緒にしたのだが、つい先日まで王族だったメイドに料理などは全然出来ず、姫に戦力外通告を突き付けられ、明日から料理を学ぼうと心に誓ったりもした。

夕飯も食べ終わり、メイドは与えられた部屋で寛いでいた。

コンコンッ

すると、扉をノックする音が響く。

「は、はい。ちょっと待ってください」

手早く服装を直し、扉を開けると、魔王が目の前にいた。

「ハッ……何でしょうか、魔王様？」

一瞬、メイドは驚きの表情を顔に宿すが、すぐに緊張した面持ちになる。その辺はさすが元王族というところだろう。

「そう緊張しなくて良いよ。ところで、少し付き合ってくれないか？」

「は、はい！」

魔王はメイドの了承の声を聞くと、『着いてきてくれ』と言って、どこかに向かって歩き出した。

メイドは『ま、まさか、夜枷！？』と、一瞬頭をよぎるが、直ぐ様それは取り越し苦労だったと認識することになる。

「えと、ど、どこに向かつてるのですか？」

「ああ、スマン。目的地を言っただけだったな。外だよ外」

魔王は眼前に見えてきた玄関に指を指して言った。

「ま、まさか……外で……よ、夜枷を！？」

メイドは緊張のあまり半ば叫んでしまったが、それは静かな魔王城に小さく響き渡った。

魔王はそんなメイドを見て、ハハッと笑って否定した。

「そんなことはしなねーよ」

魔王城のただっ広い玄関を抜けて外に出ると、魔王は後ろを向きメイドと向き合わせの形になる。

「さてと……」

そう言っただけ、魔王はメイドのことを優しく抱き抱える。端から見るとお姫様抱っこ形だ。ま、一応メイドもお姫様であるのだが。

「わ、わっ！」

突然のことでメイドは当然のごとく驚いた。

「良いから黙って、俺にしがみついておいてくれ」

魔王はその言葉を発すると、突如空に向かってジャンプする。
着地したところは魔王城の中腹だった。そして、もう一度魔王は
ジャンプした。

辿り着いたのは魔王城の頂で、魔王がゆっくりメイドを降ろす。
メイドは『あわわわわ……』と泡を吹いていて、かなり笑える状態
だった。

魔王は笑うのを我慢すると、メイドに喋りかける。

「おい。大丈夫かー？」

呼び掛けたがメイドからの反応は無く、やることも無かったので
魔王は辺りを見渡した。

しばらくすると、メイドは復活した。

「あ、あの。ここはいつたい……」

「ここは魔王城の頂だよ。ところで寒くないか？」

「だ、大丈夫です。少し肌寒いですが、このくらいなら我慢でき
ます」

「そうか……」

魔王は一言そう呟いて辺り眺めだした。
つられてメイドも辺りを眺める。

綺麗だった。

夜ということで空には星がキラキラと輝いていて、さながら大小様々な宝石を散りばめたような光景だった。

魔王城の周辺に建物がある筈も無く、光源も無く、あるのは全てが消えゆきそうな静けさだけだった。

川も星々の輝きを反射して、地上に舞い降りてきた天の川のようにだった。

「綺麗ですね……」

メイドは思わず呟いてしまった。

「ああ、そうだな」

その呟きに魔王は答えた。

「それと、悪かったな」

「え？ 何がですか？」

メイドは魔王の言いたいことを理解出来なかったのか聞き返す。

「魔王軍に入れちゃったことだよ。これでお前も裏切り者になった」

「大丈夫ですよ」

メイドはキッパリと言い切る。

「ワタシは今日一日で魔王軍に入れて良かったと思いました。黒騎士様と仲良くなれたし、姫様の優しさも知れました。白魔様はよく夕食を共にしただけでよく分からなかったですが、魔王軍にいてってことは、きっと良い人の筈です」

メイドは『それに――』と続け魔王の眼を見る。

「魔王様が皆さんのことを良く想っていることを知れました。でなければ、私のことを心配してこんなことをしてくれる筈ありません。私はこの魔王城を好きになってしまったんです！　今さら出て行けと言われても出て行く気なんてサラサラありません！　こんなワタシですが、よろしくお願いします」

メイドは長い独白を終えて、改めて魔王に対して頭を垂れる。

その日、メイドは心から魔王軍の一員になった。

「こちらこそよろしく頼むな」

その魔王の一言が長かったメイドの一日が終わりを告げた。

魔王のお出掛け・出発

時が流れるのは速いモノで、メイドはすっかり馴染んでいた。

魔王はいつも如く、王座に鎮座してボーッとしていた。
そんな中、魔王は衝撃の事実に気づく。

「あれ……俺ってもしかしてハブられてる？」

何時なんどきも傍らに控えている姫は今居ない。姫はメイドを教育するために獅子奮迅していることだろう。

メイドもその教育に答えるために魔王城の中を走り回っている。

残る黒騎士と白魔だが、彼らは中庭でいつもの鍛練だ。

この前、黒騎士が魔力剣の生成と維持の及第点を越えたと魔王に報告していた。魔王はそれを聞き、『そろそろ試練でも与えてやるか』なんて思ったりしていた。

「これは完全にハブられてるな……」

どうすっかなーと、王座の背もたれに体重をかけて、魔王は瞼を閉じ、眠ったように考える。

やがて、考えが浮かんだのか、目をゆっくり開く。

「よし、喧嘩を売りに行こう！」

その後、姫に出かける旨を伝え魔王城を出ていこうとした。すると、どこから聞きつけたのか、黒騎士が焦ったように魔王の前にやって来た。

「私も行きます！　魔王様を一人にする訳にはいけないので一緒に行かせてください」

「無理だな。俺はおもいつきり走るからついて来れないと思うぞ」

黒騎士は頼んだが、物理的に不可能だということを示して魔王は拒絶した。

「いや、でもしかし……」

「だったら、俺が黒騎士を抱き抱えて走るか？」

魔王が冗談混じりで代替案を示す。

「……………それで構わないので連れて行ってください」

一瞬、言葉が詰まるが、黒騎士はしっかりと答えた。

「はあ……………」

深くため息をつく魔王。

「外で待ってるから、早く支度してこい」

「はい！」

黒騎士が外出の支度のために魔王城に消えてゆく。

魔王が約束通り外で待っていると、十分ほどで黒騎士がやって来た。

黒騎士の格好は最低限の武装で、おそらく抱き抱えられる魔王に配慮した結果であろう。

ちなみに魔王の格好は高そうな衣服だが軽装で、とてもでは無いが魔王に見えない。

「じゃあ、行くか……」

その言葉をきっかけに魔王は黒騎士を抱き抱える。もちろんお姫様抱っこの形だ。

黒騎士は『こんなこと初めてです』と恥ずかしがっていたが、本当は二度目だということを魔王は黙っておこうと思った。

魔王は走り始める。

一応、黒騎士を抱き抱えてることから走る速度は抑えているが、それでも新幹線以上の速度だ。

黒騎士は初めのうちは悲鳴をあげていたが、だんだん慣れてきたのか落ち着いていった。

走り始めて一時間。魔王は川を見つけたので、黒騎士の休憩のためにそこで休むことにした。

「やっぱり黒騎士は凄いな」

「な、なにが、ですか……」

黒騎士は息も絶え絶えに聞き返す。身体の方はぐったりとしていて大きな石にもたれ掛かっていた。

「さっきの速度で気絶しないことだよ」

「わ、私も、魔王様の、配下なので、これくらいのことには、堪えられない、訳にはいかない、のです」

「とりあえず水な」

魔王は川で汲んでおいた水を黒騎士に渡す。

「あ、ありがとうございます」

黒騎士は渡された水をゴクゴクと飲む。やがて、落ち着いたのか魔王に対して今更だが今回の外出について聞く。

「この度は何のために外出したのですか？」

「ああ、ストレス解消にすぐその国に喧嘩を売りにな」

「なっ……」

あまりのくだらない理由に思わず黒騎士は絶句した。

「ほら行くぞ。目的地はすぐそこだから歩きでな」

黒騎士は理由に納得できなかったが、魔王と主従の関係を結んでいるので渋々ついていく。

「本当は一人で来て喧嘩を売って、魔王城に攻め込ませるつても理由だったんだよ。でも、黒騎士がついて来ちゃたから予定変更だな」

「予定変更ですか？」

魔王は黒騎士の方に顔を向け言う。

「ああ。これからあの国に喧嘩を売る訳だが、俺に襲いかかってくる奴等は黒騎士が倒せよ。一応、これは試験のつもりだから気を抜くなよ」

「試験ならば頑張らせていただきます」

二人は真つ直ぐ目の前の国に向けて進む。

このことが切っ掛けになり、魔王を取り巻く争いが激化してゆくとも知らずに……。

魔王のお出掛け・城下町

先ほどまで居た森を抜け、魔王と黒騎士の二人は大きな関所に辿りついた。

二人の存在に気付いたのか、一人の衛兵が二人の元にやって来た。

「君たち、どこから——」

衛兵の言葉を遮るように、魔王は衛兵の腹を殴りつける。衛兵の身体はぶっ飛び、他の衛兵たちが騒ぎだした。

そのことに対して、黒騎士は焦ったように魔王に訪ねる。

「な、なにしているのですか!？」

「ほら、試験開始の時間だぞ。張り切って頑張りなさい」

「はあ……」

溜め息を吐いた黒木氏は雷属性の魔力剣を生成し、衛兵たちに斬りかかる。

魔力剣の基本形状は西洋剣だ。黒騎士は日頃から使い慣れていたこの形状がしっくりくるのだろう。

次々と斬り倒し、すべての衛兵たちが地に沈んだことを確認した黒騎士は、魔王に身体を向け報告する。

「終わりました」

「お疲れさん。てか、殺さなかったんだな」

「はい、殺すより、気絶させた方が早く済むので」

黒騎士がしたことは、衛兵たちの金属製の防具を魔力剣で斬りつけたのだ。魔力剣には雷属性を付加させているので、感電し気絶することになる。

「じゃあ、行くぞ」

「はい」

二人は関所を抜け、国の中心に向け進んだ。

しばらく歩くと、城下町に辿りついた。

まだ、先ほどの関所の情報は流れてないようで、城下町は騒ぎも無く活気に溢れていた。

魔王はそんな城下町に興味も無いようで、活気なんて知らんとかりに城下町に中心をズンズンと突き抜けて行く。

目的地はもちろん国の中心の城である。

「あの、ま……我が主」

黒騎士は魔王に呼び掛けようとしたが、いつもの調子で『魔王様』と呼びそうになり、こんな所で『魔王様』と呼んだら騒ぎになることは間違いないなので、慌てて『我が主』と修正した。

「ん？なんだ？」

呼び方について魔王はどうでも良いらしく、黒騎士に続きを言うように促した。

促された黒騎士はひっそりとした小声で魔王に訪ねる。

「いきなり城に攻め込むのですか？」

「んー、ダメか？」

「ダメでは無いのですが、せっかく来た城下町なので、楽しむのも一興かと思いましたので」

黒騎士の言葉を聞き、名案とばかりに手のひらをポンツと叩いた。

「よくやった。あーそんな選択肢もあったんだな」

手をおでこに当て『迂闊だったー』と言う魔王。

「行くぞ、セリナ」

本名を呼ばれたことに黒騎士は一瞬ポカンとするものの、魔王が手を出してきたので思わずその手を握った。

「え？あ、はい！」

二人は活気に溢れる城下町を楽しんだ。

ケバブのような食べ物を二人は食べ、溢れる肉汁と香辛料がピリツと辛いソースと組み合わせに舌鼓を打ったり、他にも露店を巡り、魔王城にいる魔王軍のメンバーにお土産を買ったりした。

そんな時間がしばらく続き、二時間くらい楽しんだ時だった。

急に城下町は露店を畳んだりと慌ただしくなり、安穩とした時間は終わりを告げた。

おそらく気絶から目覚めた関所の衛兵が城に報告したのだろう。

魔王は先ほど衣服店で買っておいたローブを黒騎士に渡す。

「纏っておけ」

そう言うと、魔王はローブを纏う。それに続くように黒騎士もローブを纏う。

「よし、喧嘩売りに行くぞ」

「はい！」

その黒騎士の返事は、先ほどまでの楽しそうな声色では無く、騎士らしい毅然とした声色だった。

そんな二人の異様な様子に気がついたのか、城下町を巡回していた衛兵が止まらせようと、進行を遮るように二人に立ちはだかった。

そんな絵衛兵を黒騎士は軽々と殴り飛ばして排除する。

魔王軍の中では解りづらいが、黒騎士は人間のトップクラスの身体能力を持っている。

次々と現れた衛兵を排除して二人は城の城門にまで辿り着く。城門は固く閉ざされていて、人間一人の力では到底開かないものだ。無論、魔王なら余裕で開くことが出来るだろうが。

城門の警備を黒騎士が気絶させた後、魔王が城門を指差しながら訊ねる。

「どうすんだコレ？言つとくが、俺は何にもしないぞ」

「こうします」

そう言つて、魔力剣の生成を始める黒騎士。

十秒くらいの時間をかけて、鋭く研ぎ澄ませるように薄く薄く慎重に魔力剣を生成する。

その魔力剣を見て、魔王を苦笑する。奇しくもそれは日本刀のよな片刃の形状をしていた。

「これが私の切り札です」

黒騎士の言葉を聞き、再度苦笑する。

「魔王城に帰つたら、それに銘を与えてやる。楽しみにしておけ」

その声が聞こえたのか、黒騎士は嬉しそうに微笑み、城門を斬りにかかった。

魔王のお出掛け・尋問

城門が、黒騎士の熟練された剣技と鋭い切れ味によって斬り崩されていく。

「これで終わりです！」

その言葉を最後に、今まで堅牢にそびえてた筈の城門は紙屑同然に崩れ去る。

「よくやった。行くぞー」

軽く称賛の声を黒騎士にかけると、魔王は城門が無かったように城門を通り抜け、城に侵入する。

そんな魔王の後に続き、黒騎士は慌てて魔力剣を消すと城に侵入する。

「ま、待つてください！」

黒騎士が魔王に追い付くと、魔王はエントランスに佇んでいた。

「なあ、どこから行ったら王座の間に辿り着けるんだ？」

魔王の言葉を聞き、黒騎士はエントランスを見渡す。

目の前には二階に続く大きな階段。右側にはどこまでも続いていそうな長い廊下。左側にも長い廊下が見られるが、右側の廊下よりは短いらしく曲がり角が見受けられる。

どの道にもかなりの数の衛兵が居るようだが、さして問題は無い

ので二人の眼中には無かった。

「そうですね……。しらみ潰しに部屋を開けていくか、衛兵を一人捕まえて場所を吐かせるというのはどうでしょうか？」

「じゃあ、一人捕まえるか」

「でしたら、私はその間に敵の数を減らすことにします」

「なら任せた」

そう言い残すと、魔王の姿は消えた。

次の瞬間にはおよそ二十メートル離れていた衛兵の首を正面から掴み持ち上げていた。その衛兵の周りにいた衛兵達は動くことも出来ず、啞然としている。

魔王はただ走っただけ。それだけで周りにいた衛兵達は魔王が消えたように見えた。黒騎士には残像が見えたのか『さすがです』と呟いていた。

すぐさま魔王は捕まえた衛兵を掴んだまま、黒騎士のもとに戻る。

「こいつで十分だよな？」

「十分ですが速すぎます。おかげで私の見せ場が無くなってしまいました」

「あ、悪い。ま、今からでも挽回出来るさ。行つてこい」

「行つてきます」

そう言った黒騎士は衛兵を倒しに前進した。

「さて、と……」

魔王は掴んでいた衛兵を降ろしてやる。

「王座の間はどこにあるんだ？」

「だ、誰が侵入者なんかと言うものか！」

得体の知れない侵入者を王様のもとに行かせる訳にもいかないの
で、衛兵は怯えながらも断る。

魔王はニコリと笑うと、衛兵の右腕を折った。

「——ッ!!」

声にもならない痛みが衛兵に襲いかかる。

「よし、次は左腕だな」

続けて魔王は左腕も折ろうとする。

「ま、待ってくれ！　言うから——」

衛兵の叫び声を無視し、魔王は左腕も折る。

「あ、悪い。ついつい折っちまった」

痛みに堪える衛兵にニヤニヤと笑いかける魔王。

「で、教えてくれるんだよね？」

「上です、上！ 三階に王座の間があります！ た、助けてください！」

「初めから教えてくれたら良かったんだよ」

そう言つと魔王は衛兵を気絶させる。

そして、ちょうど良いタイミングで黒騎士が戻つて来た。

「ただいま終わりました」

魔王が黒騎士の背後を見ると衛兵達が幾重にも重なって倒れており、まるで山のようになっていた。

「こつちもちょうど終わったとこ。王座の間は三階だつてさ」

「そうですか。では、行きましょう」

「ああ」

二人は三階を目指し、エントランスにあつた二階へと上がる階段を登った。

二階も一階とさして変わらず、衛兵達がうじゃうじゃ居たが、黒騎士がそれを蹴散らす。

そして、三階に上がる階段を見つけ出し、登った。

三階に着くと、そこに居たのはこれまでの衛兵では無く、三人の

騎士だった。

「隊長。こいつらは僕がやっても良いですよね？」

一人の軟派そうな男性騎士が真ん中にいる隊長と呼ばれた騎士に訊ねた。

「油断はするなよ」

その隊長の言葉を聞いた軟派騎士は即座に魔王に対し斬りかかる。魔王は一言呟く。

「……黒騎士」

「お任せください」

魔王の言葉に反応した黒騎士は魔力剣を生成し、軟派騎士の首を斬り飛ばす。

その光景を見た騎士達は驚きを隠せなかった。

「ば、馬鹿な！？ オレイクは性格は最低とは言え、騎士団の
No.3だぞ！？」

最後の一人の女性騎士が悲痛の声をあげる。

「何を言ってるんだ。そいつが弱かったから、この結果なんだろう？」

魔王が当然の結果とばかりに言う。

「仕方ない。儂が行く」

そう言って、前に出る騎士隊長。

「隊長。私に行かせてください！」

「いかん。お主では奴らに勝てんよ。見ていなさい」

「は、はい……」

苦虫を噛み潰したような顔になる女性騎士。

その掛け合いを見た魔王は黒騎士に言う。

「あー、めんどくさい。さっさと、倒しちゃって黒騎士」

本当にめんどくさそうに言う魔王。魔王には、先ほどの騎士達の会話が山門芝居に見えたのだろう。

「お任せを」

魔王の命令を受けて、黒騎士が騎士隊長と対峙した。

魔王のお出掛け・騎士

二人の騎士が対峙している。

たった、それだけのことなのに辺りの空気はピリピリとしていた。しかし、その空気を感じていたのは女性騎士だけで、魔王はそんな空気に対しイライラしていた。

「私の名は黒騎士。そこに居られる主の剣」

騎士は闘いに形式美を求める。なので、騎士の闘いは名を名乗ることから始まる。

「ふむ。儂は——」

ドコッ！

急に大きな破壊音が鳴り響き、騎士隊長の名乗りは妨害される。その破壊音は魔王が壁を殴りつけたため発生した音だった。

「あー、もう長い！ 黒騎士、今は騎士として闘うためにやって来たんじゃないんだ。さっさと倒せ」

その魔王の言葉を聞いた黒騎士は申し訳なさそうに騎士隊長に言う。

「すまない。主の命令だ」

「ならば仕方ない。気にせんよ」

二人の騎士の間が張り詰める。

『いざッ』

同時に地を蹴って、斬りかかる。

ガキッン！

黒騎士の魔力剣と騎士隊長の西洋剣がぶつかり、鏑迫り合いになる。

この時、黒騎士は少しばかり驚く。雷属性の魔力剣とつばぜり合いをして感電しなかったのだ。確かに、剣の持ち手の部分で電力が軽減されるかもしれないが、それでも手に力が入らなくなって剣を落としてしまうのだ。

しかし、騎士隊長は感電せずに剣を握っている。どういう仕組みなのか、黒騎士はわからなかったが、騎士隊長に心の中で小さく称賛を送った。

「やはり、それは魔力剣か。少しばかり痺れたぞ」

鏑迫り合いの中、騎士隊長は黒騎士に喋りかけた。

「ならば、どうする？」

「なに、こうするだけだ」

魔王の目の前では騎士達の鏢迫り合いが繰り広げられていた。

「なかなか、あの隊長とやらは強いな」

「当たり前です！ 隊長は何て言っただって、この国一番の騎士なのですから！」

目の前の鏢迫り合いを観ていた魔王に女性騎士が騎士隊長の自慢をしてきた。

「うるさいな。この国の騎士は黙って闘いを観ていることが出来ないのか」

「うるさいとは何ですか！ 良いですか、騎士隊長はですね——」

うるさいと言われたのに、まだ喋る女性騎士を無視して、魔王は目の前の鏢迫り合いに目を向けた。

『なに、こうするだけだ』

目の前向けた先では、騎士隊長が鏢迫り合いを止め、黒騎士と距離をとったところだった。

騎士隊長は距離をとると、今まで握っていた西洋剣を床に投げ捨て、右手を前に出した。

すると、その右手にどんどん魔力が収束され、赤い魔力剣が生成された。色からいって、炎属性の魔力剣だろう。

「へえ、あいつも魔力剣生成出来るのか。面白くなってきたな」

「——でしてね。隊長はこの前行われたこの国一番の騎士を決める大会で優勝でしたんですよ。その時、隊長が言った言葉は——」

魔王が面白そうだと呟く隣で、女性騎士の騎士隊長自慢も続く。

騎士隊長がこれからが本番だと言わんばかりに言う。

「これで五分五分に持ち込めた筈だな」

「そうですか。それが貴方の本気ですか……」

まるで、失望したとばかりに黒騎士は言った。

黒騎士から見てみれば、騎士隊長が生成した魔力剣は拙過ぎたのだ。生成に2秒近くかけたのに、魔力の圧縮は黒騎士の魔力剣より遥かに劣っていた。

実際問題、騎士隊長の生成した魔力剣は人間にしてみれば、とてもなく凄いのだ。しかし、その魔力剣より黒騎士の生成した魔力剣が凄過ぎたのだ。

もうこんな闘いは止めようと黒騎士は騎士隊長に向かって駆け出す。

魔力剣での斬り合いは、圧縮率で勝敗はほとんど決まってしまう。個人の剣技も多少関係するのだが、純粹な斬り合いにさして意味は無い。

すぐに決着はついた。

互いに右上から左下に向かっての剣戟。互いの魔力剣が交差する時、黒騎士の魔力剣に騎士隊長の魔力剣が切断され、騎士隊長も斬り捨てられた。

黒騎士が騎士隊長を一瞥し、魔王のもとに戻る。

「ただいま終わりました。先に進みましょう」

「ああ、そうだな」

悲しそうな黒騎士の表情に魔王は事務的に答えた。

「——してですね。かくして隊長……で、え!？」

女性騎士も騎士隊長が倒されたことに気がつき、騎士隊長にすがり付いた。

「隊長! 隊長ってば!」

「すまん……。どうやら、僕はまだまだだったらしい」

力無く女性騎士に語りかける騎士隊長。

「隊長……」

女性騎士は涙を浮かべ、敬愛する騎士隊長を見続ける。

そんな女性騎士には目もくれず、魔王は『行くぞ』と黒騎士を促し、王座の間に進んでいった。

魔王のお出掛け・帰宅

二人は目的地に向かい真っ直ぐ進む。

やがて、豪華絢爛な扉が二人を迎えた。

黒騎士が魔王に対して訪ねる。

「私が開けましょうか？」

「いや、いい」

魔王はその提案を断りをいれると、豪華絢爛な扉を殴り破壊した。

部屋の中を覗いてみると、どうやら王座の間で間違いないらしい。王座には老人が怯えながら座っており、その老人が国王なのだろう。周りには、衛兵達が国王を守るように並んでいた。

魔王と黒騎士が王座の間に足を踏み入れる。

それを見た国王が、オドオドしながら魔王に対して訪ねる。

「な、何が目的なんじゃ？」

魔王は淡々と答える。

「特に目的は無いな」

「ならば、何故我が国を襲うのじゃ」

「強いて言うなら、暇潰しだな。他にも理由が無いことも無いが」

「そ、それだけのめに……」

この場に居た魔王と黒騎士以外の人間全員が啞然とした。

「黒騎士、最後の仕上げだ。あいつらを潰せ」

「はい」

魔王の命令により、黒騎士で掃討に入る。

啞然としていた衛兵達は慌てて黒騎士に意識を向け応戦しようとしたが間に合わず、次々と地に沈んでいった。

最後の一人になった国王に向かって魔王がニヤリと笑いかける。

「さて、残るは貴様だけだな」

国王はかなり狼狽えた。

「な、何でも言うことを聞く。だ、だから命だけは助けてくれ！」

もう、老人には国王としての体裁を取り繕うことが出来ず、ただただ命乞いをするしか出来なかった。

「本当に何でも言うことを聞くのか？」

「もちろんじゃ」

国王は希望を見いだしたとばかりに魔王を見る。

「では、騎士を一人貰っていい？」

魔王はそう言うと、『助かった……』と呟く国王の頭を殴った。殴られた国王は頭が潰れており、とても生きているようには見えなかった。

「殺してしまって良かったのですか？」

傍らに控えていた黒騎士が魔王に訪ねた。

「ああ、別に良いよ。あんな国王としての体裁を取り繕えずに懇願をするような奴はこの国のトップにいない方が良くない？」

「そうですか。それで、騎士を貰うとは先ほどの女性騎士のことですね？」

黒騎士は疑問に思っていたことを魔王に訪ねた。

「そうだが？」

「いえ、彼女は止めた方がよろしいかと。彼女は魔王様に忠誠を誓わないと思いますし、何より騎士隊長を殺した私に対して嫌悪感を抱いている筈です」

「ああ、そのことか。なら安心しろ。姫に記憶の改竄をさせる」

今日一番の驚いた表情を見せる黒騎士。

「姫様はそんなことまで出来るのですか……」

「姫は防御と補助に秀でてるからな。それぐらいは余裕だ。よし、迎いに行くぞ」

王座の間から出て、先ほど騎士と闘った場所に着くと、既に騎士隊長の遺体は無く、女性騎士が仁王立ちしていた。

「貴方達……貴方達のせいで隊長は!!」

女性騎士が腰から剣を抜き、がむしゃらに斬り込んできた。

そんな女性騎士に対して魔王は動かず、甘んじて剣を受けた。斬り裂かれる衣服。しかし、魔王の身体には一切の切り傷は出来なかった。

「え……」

目の前で斬ったのにも関わらず、切り傷が出来ない不可解な現象が起き、女性騎士はフリーズしてしまった。

魔王はその隙を見逃さずに、女性騎士の首筋に手刀を入れて気絶させる。

「おっと」

倒れ込んできた女性騎士を優しく抱き止める魔王。

そのまま女性騎士を抱き抱え魔王は『帰るぞ』と黒騎士に言い、城を後にした。

もうすっかり夕方になっていた。

城から歩いてきた魔王達はこの国に来るに魔王と黒騎士が降り立った川辺に辿り着いた。

ここまで来るのに、何度も衛兵が立ちはだかつてきたが、その度に黒騎士が撃退した。

「さて、黒騎士。両手がふさがってるから、帰りは俺の背中に抱きついてくれな」

「そういえば、帰りもあるのですよね……」

行きの時の速度を思いだし、気落ちする黒騎士。

「ま、慣れだ慣れ。頑張りなさいな」

「はい……」

魔王城に着いた時に黒騎士はどうなってるのだろうと思いつながら、魔王はオレンジ色に照らされる森の中を一直線に走っていた。

魔王城のお留守番

「はあ……」

姫は人知れずため息をついていた。

今日の朝は目覚めが良く、清々しい一日の始まりだった。しかし、その幻想は早くも崩れ去った。

つい先ほど、メイドと供に掃除をしていたところ、魔王が姫のもとを訪れ言ったのだ。なんでも、『ちよつと出掛けてくる』とのことだ。

別に魔王の身の心配をしている訳では無い。ただ、魔王のその破天荒な性格で、また面倒事が舞い込んでくるのではないかと心配しているのだ。

「こうしてはおれません」

姫は、魔王一人での外出はある意味危険と判断して、予防作を用意しておくことにした。

一言二言、姫のその端整な唇から呪文が紡がれる。

魔法が完成したのか、姫の身体は霞のように消えてゆき、遂には完全にその場から消えてしまった。

次の瞬間、姫の身体は魔王城の中庭にあった。
いきなり現れた姫に驚く黒騎士と白魔。黒騎士は純粹にいきなり

現れたことに對して驚いているのだが、白魔は人間が転位魔法を扱えていることに驚いている。

転位魔法は魔族でもほんの一握りしか使うことが出来ない、かなりの上位の魔法だ。かくゆう、白魔ですら使えないのだ。ましてや人間が転位魔法など出来る筈は無い。しかし、白魔の目の前でその常識は崩壊したのだ。驚かない訳が無かった。

「黒騎士さん！」

「は、はい！」

初めて聞く、姫の焦ったような声に黒騎士は驚くのを止め、反応する。

「今すぐ、魔王様のもとに行ってください。魔王様は一人で外出するつもりなので、なんとか付いて行ってください」

「わかりました！」

そう言うと、黒騎士は魔王のもとに急いだ。それを見届け、姫が安堵の表情を浮かべた。そこに不意打ちとばかりに白魔が喋りかける。

「……少し良いか？」

「え…ええ、大丈夫ですよ」

突然のことに一瞬反応が遅れるものの、姫はなんとか取り繕う。

「……何故、転位魔法を使える？ あれは魔族しか使えぬ筈」

「ああ、そのことです。ただの努力ですよ。人間より魔族の方が魔法を上手く扱えるのは、魔族の寿命が人間に比べ長いからです。その溝さえ埋めてしまえば、人間でも転位魔法を扱うことが可能なんですよ」

「……そうか」

白魔は何か考え込むように腕を組んだ。
そのまま数分間、時が止まったように中庭は静まった。

「あの、もうよろしいですか？」

痺れを切らしたように訪ねる姫。

「……すまん。もういい」

白魔はそう言い残して、中庭から立ち去っていった。

その後、中庭を離れてメイドと合流した。メイドは突如として姫が消えたことに吃驚したようだ。

「いきなり消えないでくださいよ」

「悪かったですね。一刻を争う事態だったのです」

「それなら仕方ないですね」

辺りの床を見渡してから姫は言う。

「それで、私がない間にどこまで掃除は進んだのですか？」

丁寧な言い方だが、姫の表情はまるで般若の仮面が張り付いているようだった。

「ひっ……！」

あまりの怖さにメイドはたじろぐ。

「ご、ごめんなさい！　姫様が急にいなくなったので、辺りを捜してました……」

「たしか貴女は私が転位を使えることを知っていましたよね？」

「……忘れてました」

メイドは目線だけで辺りを伺う。

「それでは説教が必要ですね」

その死刑宣告を聞いた瞬間、メイドは回れ右をして駆け出し、逃げる。

「す、すいませんでしたあっ……！」

その光景を見て、姫は『やれやれ』と呟いた。
別に追い掛けていっても良かったのだが、姫は敢えてそれをしてい

い。どうせ、もうすぐ昼御飯なので、自ずと向こうから姫のもとにや
って来るのだ。もし来なくても、メイドは御飯を食べられないので
空腹になり、いずれは姫のもとにやって来ることになる。

「さて、昼御飯の支度をしましょうか」

ポツンと呟き、姫は昼御飯の支度に向かった。

姫の予想通り、メイドは昼御飯にやって来た。

そこで、メイドを捕まえ説教をする。もちろんメイドには昼御飯
は食べさせてあげないし、自身は先に食べているので問題ない。

説教を始めてから五時間。

時刻はそろそろ夕飯を支度しなければならぬ時間だ。それに気
づいた姫は説教を締め言葉を言って終わらせる。

「私が急にいなくなろうが何を始めようが、貴女に与えられた仕
事をちゃんと全うしてください。わかりましたか？」

「……はい」

メイドもさすがに堪えたようだ。

「そろそろ魔王様もお帰りになられると思うので、夕飯の支度をします。手伝ってください」

「は、はい！」

説教がやっと終わったことが嬉しかったのか、メイドの声も弾む。

「では、行きますよ」

二人の影は厨房に消えていった。

魔王城の一室

あの女性騎士を取引という名の拉致してきてから二日後。

女性騎士を連れ帰って来た魔王に対し、姫は飽きれ顔で迎えた。

その背に背負われていた黒騎士はぐったりしていて、さすがに魔王軍の面々はスルーし、黒騎士の名誉というか精神は守られた。

そして、件の女性騎士は魔王が強く首筋を叩き過ぎたのか、まだ目覚めていない。

「起きませんね」

「そうだな」

女性騎士が寝かせられているのは魔王城の一室にあるベッド。

現在、その部屋には寝かせられている女性騎士の他に魔王とメイドがいた。

魔王はとても柔らかそうなソファに腰を埋め、本を読んでおり、メイドは女性騎士の顔を覗き込むようにベッドに腰掛けていた。

「それにしても可愛い子ですね。……ま、まさか魔王様はこの子を夜枷用に!？」

女性騎士の顔は綺麗というより可愛いといった感じで、髪形はショートカットで髪の色は綺麗な青色だ。身体は小柄で、本当に騎士だったの?って感じた。

「お前って馬鹿だろ」

魔王は読んでいた厚めの本をメイドに投げつける。

「イタッ……」、「ごめんなさい。冗談のつもりでしたが、本当に夜枷用に連れてきたとは……」

メイドは魔王の言葉を履き違え、どんどん話をさせていった。
魔王は立ち上がり溜め息をつく、そんなメイドのこめかみに握り拳を当てグリグリとする。

「だから、違っつて言っただろ」

「あゝ……すいませんっ！！　許してください」

そんな風に、傍目には二人がじゃれ合っていると、不意にベッドが小さく軋んだ。

「……うん」

女性騎士が起きたことに気づいたメイドは魔王に報告する。

「あ、起きましたよ」

「そうだな」

「あ、あの……その手は離してくれないんですか？」

その言葉を聞いた魔王は休めていた手をまたグリグリし出した。

「うん。それ無理」

「え……ええっ！！　な、何ですか!？」

「この方が面白いからな」

当然だと言わんばかりの魔王。

「ふわぁ〜んっ!!」

しばらくメイドで遊んでいた魔王は女性騎士の顔が憤怒に彩られていることに気がついた。おそらく意識が正常に作動するようになて魔王の顔でも見たのだろう。

「き、貴様は!?!」

「よう。気がついたか」

魔王はグリグリを止め、素早くメイドを自分の後ろに避難させた。魔王としては、これと言って危険は無いのだが、メイドは違う。魔法を使えると言っても、この距離なら魔法を唱えるより先に攻撃される可能性があるのだ。もっとも、傷を負っても姫が治してくれるのだが。

メイドは突然のことに驚いて慌てふためいていたが、魔王はそれを見殺しにして女性騎士と向き合う。

「気分はどうだ？」

「よくも隊長を!!」

魔王の問いを見殺しして、女性騎士は魔王に襲い掛かる。魔王はそれを難なくかわして、女性騎士の動きを封じた。

「メイド。こいつを拘束してくれ」

「は、はい！」

メイドは急いで女性騎士に対し拘束魔法をかける。

「何をする！！」

「ご、ごめんなさい！」

女性騎士の荒げた声に思わず謝ってしまったメイドに対して、魔王は諭す。

「謝ることはねーよ」

「そ、そうなんですか？」

「そうなんだよ」

魔王とメイドの会話に腹がたったのか、またもや声を荒げる。

「何だと！？」

「ひっ………すみません」

「だいたい、あなた達は何なんだ！？」

今更ながらに、最初にするべき質問を訪ねる女性騎士。

「ああ、俺は魔王だから」

魔王は何の溜めもなく質問に対して軽く答えた。

「それと、今日……正確には二日前からだ、お前は俺の奴隷になったから」

啞然とする女性騎士に続けて魔王は現状説明をする。

「ちなみにお前の国の国王から許可は貰ってるからな」

「嘘だ!!」

認められないのか真っ向から否定する女性騎士。

「そう思いたければ、そう思えば良い。だが、事実としてお前は俺の奴隷となった」

「……………」

声も出ないくらい悔しそうな女性騎士。

「メイド、飯食べに行くぞ」

「は、はい」

そのまま二人は部屋を出て鍵を閉める。

この部屋は軟禁用の部屋で、外側からしか鍵は閉められない構造になっている。

「もう良いぞ。拘束を解いてやれ」

「わかりました」

メイドが拘束魔法を解くの見届けて、食堂に行こうとしたが、魔王はあることに気がついて、部屋の中に向かって喋りかける。

「ああ、お前の名前は青隸せいれいにしたから覚えておけよ」

部屋の中から反応は無く、その言葉が届いたかはわからないが、魔王はメイドを促し食堂に向かうことにした。

魔王城の廊下にて

「何か忘れてる気がする……」

とある日の晚餐、魔王が一人呟いた。

魔王城の晚餐というか、食事全般は基本的に全員揃って食堂で食べることになっている。今日も今日とて、皆が揃い、和気藹々と食事をしていた時のことである。

「えと……何を忘れてるんですか？」

魔王の呟きに直ぐ様反応するメイド。

「それが、何のことかサッパリ思い出せないんだよな。わりと大事なことだった気がするんだが……」

魔王は思い出そうと天井を仰ぐ。思い出せそうで思い出せない。このむず痒い感覚が魔王を襲っている。

そんな魔王を見かねてなのか、姫が食べるのを止め言う。

「もしや、青隸のことでは？」

「青隸……って誰だっけ？」

魔王が真面目な面持ちで姫に聞き返した。

「はあ……」

姫は溜め息をつき、代わりとばかりにメイドに説明を視線で促す。その姫の視線に応えるべく、メイドは説明し始める。

「一週間前くらいに魔王様が連れ帰ってきた女性騎士のことですよ。本当に忘れてしまったんですか？」

「ああ、そういえばそんなこともあったな。あとで見に行くとするか」

その魔王の様子を見て、メイドは『本当に忘れてたんだ……』と内心呟いた。

「では、私も魔王様に付いて行くことにします」

今まで静かに食べていた黒騎士だったが、青隸のことが気になっているようだ。

「ああ、良いぞ。メイドも来るか？」

「は、はい」

「ま、とりあえず食べ終えてからだな」

夕食も終わり、魔王と黒騎士とメイドは青隸を軟禁している部屋に向かっていた。

「そういえば、青隸の飯はどうなっていたんだ？」

一応とばかりに、青隸のことをすっかり忘れていた魔王は一緒に来ていた二人に訊ねた。

「私はわかりません。メイドは知っているか？」

黒騎士は知らないらしく、知っていそうなメイドに促した。

「ええっと……姫様が運んでいたらしいですよ」

自信が無いのか、たどたどしく答えた。

「そうか……。姫がやっててくれたのか。後で礼でも言うておくか」

魔王は姫に対してのお礼の言葉を考え始めた。
そんな魔王に対して、黒騎士は言葉を掛ける。

「あの、少しよろしいですか？」

「ん？ おう、別に構わないぞ」

魔王の了解を得た黒騎士は訊ねる。

「青隸のことなんですが、どうなされるおつもりですか？」

「どうするもなにも、どうもしないぞ」

その魔王の言葉に反応したのは黒騎士ではなく、メイドだった。

「えっ、それはどういうことなんですか！？ ま、まさか……夜枷
!？」

メイドの頭を軽くこずきながら言う魔王。

「ちげえよ」

その流れで魔王は黒騎士の方を見やった。すると、その顔は真っ赤に染まっっていて、ブツブツ呟いていた。よく耳を澄ますと『夜枷なら私が……』という声が聞こえてきた。

「お前もか！」

今度は黒騎士の頭を軽く叩く。パシンツと良い音した。

「ご、ごめんなさいっ！」

「申し訳ありませんっ！」

もの凄い勢いで二人して謝る。

「はぁ……もういいわ。とりあえず、夜枷とかそういうのじゃなくて、青隸が哀れに見えたから連れて来たんだよ」

「哀れですか……」

魔王の言葉に思わず呟いてしまう黒騎士。

「ああ。あそこまで、騎士隊長に陶していたのに騎士隊長は死んだ。というか、俺らが殺したんだ。哀れだろう？」

「それは……」

この場が沈黙に包まれた。

すると、ここで空気の読めないメイドが発言する。

「あ、あの……話がわからないのですが……」

「ああ、悪い。ちょっとし昔話だ。メイドは気にしなくて良いぞ」

「そうですか。魔王様がそういうなら気にしません」

「ありがとな」

そう言つと、魔王はメイドの頭を撫でる。

メイドは嬉しそくに顔を歪め、反対に黒騎士はムツとした顔になった。

「魔王様！ 早く青隸を軟禁している部屋にいきましょう」

「お、おう」

魔王はメイドの頭から手を離し、止まっていた足を動かす。

「あ……」

消え逝きそうな声を出し、手が離れたことを惜しんだようなメイド。

「は、早く行きましょう！」

黒騎士はそんな二人を急かした。

魔王の予言

「あのさあ……」

魔王は推理小説の犯人を咎めるようにジITTERと目の前の人物を見る。

「申し訳ありません！」

その視線に晒されているのは黒騎士だ。

その理由は簡単である。道を間違えてしまったのだ。先頭に立つて、ズンズン進んで行くまでは良かったのだが、黒騎士は青隸の軟禁している部屋を知らず、現在の状況に繋がるのだ。

「もういい。お前らは俺に付いて来い」

『はい』

魔王は青隸を軟禁している部屋に行こうと歩を進めた。しばらく魔王城の内部を歩き、魔王は天井を仰いだ。

そんな風の魔王に対し黒騎士は喋り掛ける。

「あの……。魔王様」

「ん？ なんだ……？」

振り返った魔王の顔には焦りの色が見てとれる。黒騎士はオズオズと訊ねる。

「もしかして、軟禁している部屋の場所忘れました？」

「ハッハッハッ……。ソナナケナイジヤナイカ」

誰が見ても嘘とわかるくらいに汗が噴き出ており、そして完璧な棒読みである。

その場に居た黒騎士とメイドにはもちろんバレバレであった。メイドは魔王に気をつかい、ひとつの提案をする。

「でしたら、ワタシが案内しますよ」

「お、おう。任せた」

魔王は言葉を詰まらせながらも何んとか答えた。

「では、行きましょう！ ほら、魔王様も黒騎士さんも早く早く！
！」

ほどなくして魔王一行は青隸を軟禁している部屋の前に辿り着いた。

「で、ここか」

「そうですよ」

魔王問いにメイドはすぐさま答えた。

「こんな部屋があつたのですね……」

黒騎士の方はというと、軟禁専用の部屋があつたことに關心していた。

「じゃあ、扉開けるから黒騎士はメイドを守っててやれ」

「了解しました」

「ワタシはそんなに弱くはありませんよ」

メイドの心からの叫びを無視し、魔王は左手で鍵を開け、ドアノブに右手を掛け、扉を開け放つ。

無論、黒騎士は魔王の命令通りメイドを守るために彼女の前に立った。

扉が開き、最初に魔王達の目に飛び込んできたのは、椅子から立ち上がり魔王達を睨んできた青隸の姿だった。

「よ！ 久しぶり」

「久しぶりではありません！！ いったい何しに来たんですか！」

喰ってかかるように、もの凄い形相で睨んでくる青隸。

そんな様子の青隸に対して、魔王はおちよくるように言う。

「どうだ、ここの飯は美味いだろっ？」

「うるさい！ そんなことは良いから隊長を返せよう……」

先ほどの喰ってかかるような様子から一転し、青隸は魔王に懇願するように泣き崩れ始めた。

「うう…隊長……。返して、返して、返してよ。お願いだから隊長を返して！」

青隸は懇願する。返してと言っている隊長を殺した原因を作った筈の魔王に対して……。青隸もこの矛盾に気がついている。

しかし、魔王しか隊長を生き返らせることの出来そうな人物を青隸は知らなかった。もちろん、魔王は死者を生き返らせることは出来ないし、姫にも白魔にも出来ないし、言うまでもないが後の二人にも出来る筈も無い。

「悪いがそれは出来ない」

「何で、何でよ！ あんたならそれくらい出来るんでしょ！！」

魔王はその青隸の必死な願いをキツパリ否定する。

「死者の蘇生は神様にしか許されないんだ。だから、俺には不可能なんだ」

青隸はその潤んだ瞳で魔王を見る。

「神様……？」

「ああ。神様だ」

唯一の希望に出会ったように、青隸の瞳が輝きだす。

「どうやったら神様に会えるの!!」

青隸は必死な剣幕で魔王に詰め寄り訊ねた。

「さあな。ただ、この魔王城に居れば、いつかは会えるぞ」

「いつかって、いつ!」

「それは俺にもわからない。だが、ここに居れば必ず神様に出会うことは確実に言いきれる」

魔王は断言する。いつの日か神様が魔王城を訪れることを。

「部屋の鍵は開けておくから、これからのことは好きにしろ」

そう言い残して、魔王は部屋を出る。それを追って部屋出て行く黒騎士とメイド。

部屋にはただ一人青隸だけが残された。

部屋を出てすぐに黒騎士は魔王に訊ねる。

「あの、魔王様。神様とは本当に存在するのですか?」

「あ、ワタシも気になります」

メイドも聞きたかったようだ。
魔王は飄々と答える。

「ああ。確かに存在する」

一拍置き、遠くを見ながらも一旦呟くように言った。

「確かに存在するんだ……」

食後の一時

あれから、青隸は魔王住むことになった。

しかしながら、青隸は魔王軍のメンバーと出来る限り接点を持つとはせず、唯一の接点となったのは食事の場だけだった。

何故、食事の場が唯一の接点になったかというところ、それは魔王城のルールによるモノであった。魔王城での食事は、ある一定の時間帯に食堂に居ないと食べることが出来ない。

初めのうち、青隸は食堂には行かないことにして、魔王城の付近に自生している植物や野生の生き物を狩って食べていた。だが、魔王城の付近なのが理由なのか食べられる植物は少なく、ほとんどの植物には毒が含まれていた。また、野生の生き物に至っては、とても凶暴で、青隸のレベルでは命がけの狩猟になってしまった。青隸には、おいそれと食料調達が出来ない状況だった。

魔王がそのことに気がついたのは、青隸が魔王城に住み始めて二週間も過ぎようとしていた頃である。

ある日の晚餐、魔王達は食堂で食休めの談笑をしていた。

「そう言えば、青隸の顔が少しやつれてるように見えるんだが、俺の気のせいかな？」

魔王の問いにメイドが答える。

「あ、ワタシも思っていました。病気が何かでしょうか？」

そう言つと、メイドは心配そうに顔を下に傾ける。

そんなメイドに続き、心配そうな声をあげる。

「そうだな。私に出来ることがあれば良いのだが……」

そんな二人の様子を見た魔王は、腰を下ろしていた椅子から勢いよく立ちあがる。

「よし、今から皆で青隸の様子を見に——」

「魔王様！」

突然、魔王の言葉を遮る姫。

「ど、どうした……？」

魔王は突然の姫の声に吃驚しながらも、なんとか平常を装う。

「おそらく、青隸がやつれ出したのは飢餓が原因だと思われます」

「飢餓？」

魔王の疑問に対して、姫は丁寧に説明し始める。

「ええ、そうです。食堂に来ることを拒んだ青隸には魔王城周辺で食料を調達しか食事を摂取する手段がありません。魔王城周辺に自生する植物はほとんど毒素を含んでいますし、野生の生き物に至っては凶暴過ぎて青隸の実力では狩ることは難しいと思います」

「そうか……。それはなんとかしないとな」

魔王は腕を組んで考え込む。

「あの、魔王様……」

恐る恐るといった感じで、メイドは魔王に喋り掛ける。

「ん？ 何だ……？」

「出来たらで良いんですが、青隸ちゃんも一緒にご飯を食べられるようにしたら良いと思うのですが、どうですか？」

メイドの提案を聞き、黒騎士も賛同する。

「そうだな。それが良いな」

「黒騎士さんもこう言ってることでし、良いじゃないですか魔王様」

仲間を得たメイドは、駄目押しとばかりに魔王に詰め寄る。

「んー、無理やりはちよつとな……」

「きつと、青隸ちゃんはプライドが邪魔して食堂に来れないんです

よ

「プライド？」

「そうです。プライドです！ 一度言ったことを訂正出来ないんですよ」

魔王は『んー』と、考え込む。

するとそこで、静観していた姫が声をあげる。

「いいのではないですか？」

姫の援護射撃を得、メイドは魔王に対したたみ掛ける。

「ほら、姫様も良いと言ってるんですし、良いじゃないですか！」

「そうだな……。じゃあ、後で俺が青隸に言いに行くことにするわ。これで、良いんだろ？」

魔王のその言葉を聞き、メイドの瞳がキラキラと輝く。

「はい！」

「仕方ないな。ちょっと頑張ってみるよ。でも、期待はするなよ……？」

「ありがとございます魔王！」

そう言って魔王に抱きつくメイド。

それを見てしかめっ面になる黒騎士。

我関せずといった感じでお茶を啜る姫。

そして、相変わらず言葉を発しなくて空気の白魔。

最後に、苦笑いしながらもメイドを受け止める魔王。

今日も今日とて、魔王城は平和である。

青隸の食糧事情

青隸は一人だった。

その場所は魔王城にほど近い川の畔。時刻は夕暮れで、夕日が川の水面にキラキラと反射しており、幻想的までとはいかないモノの、とても綺麗な場所だった。

「はぁ……」

そんな美しい空間の中、青隸は人知れず溜め息をついた。

「あゝ！ お腹空いたあつ！！」

そう、彼女の溜め息の原因は空腹である。

青隸は、自由になった日、姫に食事は皆で一緒に食堂で摂らないと用意しないとわれ、それを断っていた。

しかし、断ったのには理由があった。

魔王や魔王の仲間達と同じ食事を食べることが嫌であったし、尚且つ、食事を用意してもらうという行為に嫌悪感を抱いた。それに、今までの騎士としての経験の中に野営をしたこともあったので、自分なら魔王城の周りの森の中で食糧を入手することなど容易いだろうという自負もあった。

しかし、現状はどうだろう？

今、青隸自身は空腹で苦しんでいる。それも顔が少しやつれてしまっただ。

ハッキリ言っ、駄目駄目だった。

食べられる植物を探してみるも、この魔王城の近くに自生しているほとんどの植物には毒を含んでいるモノばかりだった。だったら今度は生き物を狩って食べようとしたら、この付近に生息している生き物はとてもではないが青隸一人で狩猟出来るようなレベルでは無く、凶暴過ぎてなんとか逃げ切るのが精一杯だった。

「あの時は本当に死ぬかと思った……」

数日前の苦い経験を思い出し、青隸は嘆息をもらす。

よって、青隸が唯一、危険が少なくまともに獲得出来たのは川魚だけだった。

しかし、運命は無情だった。青隸には全くといって魚を捕まえる才能が無く、釣りで頑張ってみるもいつも根掛かりして失敗し、素手で捕まえようと努力しても、全然捕まえることが出来なかった。

「本当にボクは駄目だな。魔王はまだしも、川魚までにも軽くあしらわれる」

青隸は川の水面に映る自分自身を見る。なんとも情けない顔をした顔がそこには存在して、思わず苦笑いしてしまった。

「隊長……。どうしたら良いですか？」

虚空に向かつて、今は亡き敬愛する隊長に喋りかける。無論、青隸には靈感といった死者と話すことの出来る凄いことは出来ない。

ただただ、虚空に向かつて、喋りかけてしまったのだ。

「なんであの時、食事のことを断ってしまったのでしょうか？ 今考えてみたら、あの姫という人はボクが今の現状に陥ることを憂いて食事に誘ってくれたんですね。彼女からしたら、ボクは邪魔者ではないのに……」

「今からでも間に合うと思うぞ」

いきなり背後から声が聞こえ、青隸は身構える。

「そう身構えるなって」

青隸が振り返り背後に居る人物を確認すると、憎むべき対象であり、絶るべき対象である魔王がそこには居た。

「何の用だ」

先ほどとは打って変わり、凄い剣幕で魔王を睨めつける青隸。

「何の用って、ほれっ」

魔王は手に持っていたバケットを青隸に渡す。

「腹減ってんだろ？ 食えよ」

青隸がバケットを開き中身を確認すると、サンドイッチがこれで

もかといっくらい詰まっていた。

「いない」

そう言って、青隸はバケットを突き返そうとする。

「それは困るな。それはお前が全部食べる。俺としてはどうでも良いんだが、メイドがお前のことを心配しているんだ。だから、せめてそれくらいは全部食べる」

勿論、この言葉は嘘である。

魔王も青隸のことを少し心配していて、どうでも良いというわけでは無い。単純に魔王がカッコつけたかっただけである。

「だったら、食べさせてもらう」

青隸も素直では無かった。本当はサンドイッチだと分かった段階で齧り付きたかったが、意地で突き返そうとした。しかし、メイドが心配していると聞き、サンドイッチを食べることを正当化した。

「じゃあ、もう俺は行く」

そう言って、魔王は立ち去ろうとしたが思い出したように一言付け足した。

「ああ、食堂に来たかったら来いよ。魔王軍総出で歓迎してやる」

この言葉により、青隸は食堂に行くことになるのだが、それは二日後の話で彼女も色々迷ったのだろう。

魔王城への闖入者

「魔王様。少しよろしいでしょうか？」

厚い雲が空を覆い、いつ雨が降ってきそうな日の昼下がりだった。

本日は黒騎士の鍛錬も無く、まるで俺の居る場所が世界の中心だと主張しそうに中庭の中心に居座った魔王が空を見上げ「雨降りそうだな」と思っていると、姫が向こうからやって来た。

「ん？ なんだ？」

そんな姫に対して魔王は用件を訊いた。

「数名の魔族がこの魔王城に近づいて来ているようです」

用件の重さと打って変わって、何の緊迫感も無く、淡々と魔王に對して言う姫。

「近づいて来ているようですって、今まで通りに俺に報告なんかせずに倒してくれば良いだろう」

そう、今までは姫が魔王城に近づく者を感知したら、そのまま姫が排除しに行っていたのだ。魔王はわざわざ言ってくるほどのことは無いと思っていた。

「いえ、私が見たところなかなかの相手のようで、私一人では対処しきれないと思い、魔王様に報告することにしました」

姫の言葉を聞き、魔王は考え始める。

姫が対処しきれないレベルとは、ハッキリ言って厄介である。

ご存じの通り姫の実力は人外レベルであり、人間はもとより並の魔族ではまともに勝負にもならない。

その姫がそこまで言うということは、最低でも先代魔王の部下にいた『四天王』とかいう前の世界では軽くオタクだった魔王からしたら中二病乙なネーミングの集団くらいのレベルな訳である。

「んー、そうだな……」

しばらく考え込むと、魔王はひとつの考えを思いつく。

「よし、侵入者の排除を白魔にやらせよう。アイツなら、なんとかなるだろう」

魔王自身、白魔の強さはまだハッキリとは知らなかったが、前に見た魔法のレベルから姫よりは強いだろうと判断したのである。

「たしかに、白魔さんならどうにかなるでしょう。今すぐ、白魔さんを及び致しましょうか？」

「ああ、頼む」

姫は魔王のその言葉を聞くと、白魔を捜しに魔王城の中に消えていった。

「……………呼んだか？」

姫の姿が見えなくなっただけから十分ほどで白魔の姿が現れた。

「あれ……………姫は？」

姿の见えない姫のことが気になったのか、魔王は白魔に訊ねる。

「……………彼女は雨が降りそうだと呟いて、洗濯物を取り込みに行った」

魔王は相変わらずマイペースな姫に苦笑すると、白魔に用件と言
い始める。

「お前に任務を与えようと思う」

「……………任務？」

任務なんて与えるのは初めてで、白魔は聞き間違いじゃないかと
思ったようだ。

「ああ、任務だ。どうやら魔王城に近づいてくる魔族どもがいるよ
うだな。お前にはそいつ等の排除を頼みたい」

「……………オレの仕事では無いだろう？」

白魔の側からすれば当然の反応である。

今までの侵入者は姫が排除してきたので、白魔としては何故そん

な任務を言い渡されるのが理解出来なかった。

そんな白魔に対し、魔王は先ほどの自分と姫とのやり取りを掻い摘んで説明した。

どうやらその説明を聞き、白魔は自身が任務を何故受けるのか理解したのか、魔王に任務の詳細を訊ねた。

「……人数は？」

「人数か……。そういえば聞いてなかったな。後で姫に確認しといてくれ」

そんな風な魔王の態度に気にもせず「……了解した」と言つと、白魔は魔王の前から消えていった。

白魔の背中を見送った魔王は深く溜め息をついた。

「相変わらず、白魔は絡みづらいな……」

魔王としては、無口な奴は扱いづらく、絡みづらいのである。

「ま、良しさ。そのうちどうにかなるだろ」

どこまでも楽天的な魔王は、そんな言葉を吐き、雨が降ってきてそうだったので自分も魔王城の中に入ることにした。

そんな魔王の読みは正確で、ちょうど魔王の身体が魔王城の中に入った時からポツポツと雨が降り始め、乾燥していた大地を濡らした。

「うん。我ながらナイスタイミングだな」

魔王のその自画自賛な言葉は雨音にかき消されていった。

闖入者の最後

雨がザーザーと降りしきる中、魔王は茂みの中に身を潜めながら呟いた。

「ふむ……。なかなか面白い状況になったな」

「まるでお芝居の中の出来事みたいですね」

魔王の呟きに反応したのはメイドである。彼女もまた茂みの中に身を潜めていた。

そして、茂みの中にはもう一人両手両足を縛られている状態の青隸が居た。

「お、おい！ 何でボクはしばられ——」

「黙れ」

両手両足が縛られている状態に対し、青隸は抗議したが、言い切る前に魔王の一言で一蹴された。

「アイツ等に見つかったらどうするつもりだ？」

魔王は前方を指差した。

その指の先には三人の魔族の姿があった。

一人の魔族……白魔と、おそらく侵入者だと思われる残り二人の

魔族だ。

魔王達が白魔達の会話を聞いていると、面白いことがわかった。

どうやら侵入者達は白魔の昔の仲間だったらしい。

だが、魔王としてはそんなことはどうでも良かったし、このことが原因で白魔が魔王軍を離れていっても文句はなかった。

「まさか、白魔の過去にこんな秘密が隠されてたとはな」

「まったくです。それで、白魔様はどうするおつもりでしょう？」

「さあな。でも、最悪は魔王軍を離れることになるかもな」

「それは駄目です！　まだワタシは白魔さんと仲良くなれていませんよ」

「だが、俺は本人の自由意思を尊重してるから何とも言えないな」

その魔王の一言に納得いかない様子の青隼は声をあげた。

「ちょっと待て！　自由意思を尊重だとか言ってるが、ボクの自由意思はどこにいったんだ！？」

その青隼の言葉に「あ、やべえ」と、魔王は内心焦った。

「さーて、白魔はどうするのかな」

とりあえず、スルーの方向でいこうと魔王は思った。

「だから、ボクを無視するなー！」

青隸の悲痛の叫びは無視された。

「あんたは何でこんなところにいるのよ！」

白魔の目の前にいる女の魔族が声を張り上げる。

「そうだ。ここはクロイツの居るべき場所じゃない！」

もう一人の魔族も声をあげてクロイツ——白魔ににじり寄った。

彼らは白魔の昔の仲間と呼ばれるものだった。

白魔としては一度も仲間なんてことを思ったことはなく、白魔の中での彼らはそこそこ強かったので一緒に戦場に身を置いていた赤の他人という認識でしかなかった。

しかし、彼らは幾度となく血で血を洗う戦場を白魔とともに潜り抜けたことで、白魔を大切な仲間として認識していた。

白魔にとって、自己の強さを高める以外に望みは無い。

強い者は大きな争いを惹きつける。

だから、二人の魔族と共にいたのだ。他に強い者を知らなかったから。

そんな三人で戦場を駆け巡る中で白魔は圧倒的な力に出会った。

そう、現魔王である。

先の魔王対勇者の大戦（“一代前の”魔王対“現”魔王の戦い）の中で白魔達は一代前の魔王側について参加し、現魔王と戦ったことがあった。その時は勇者のあまりの強さに逃げることでしか出来なかった。魔王はそのときのことを一切憶えていないが。

その圧倒的な強さに、白魔は彼のもとなら自分を更なる高みへと押し上げられるのではないかと思った。

そして二人の魔族のもとを去った。

白魔は矢継ぎ早に説得してくる二人の様子を見て何を言っても無駄だと判断して、態度で示すことにした。

「……此処こそがオレの居場所だ。他に居るべきところなど無い」

白魔は二人の魔族にそう言い放つと、右手を二人の魔族に向け、その右手の掌に小さな火球を発生させた。

そう、以前魔王に見せた魔法である。

雨にも負けずメラメラと肥大していく火球に魔族達は白魔のことを諦めざるをえないようで、身の危険から逃れるように身体を強張らせる。

しかし、諦め切れないのか逃げることはせずに戦闘態勢になった。

「クロイツ。今の魔王が俺たちに何をしたのかわかっているのか？」

男の魔族が白魔に問いかけてきた。

それは一方的な言いがかりに近く、白魔は嫌悪感を抱いた。

「……あれはオレ達が弱かった結果だ」

白魔は覆い尽くすように肥大していた火球を凝縮させる。

拳台に凝縮された火球はまるで太陽のように小さな爆発を繰り返
し、今にも破裂しそうな炎の塊へと変貌した。

「おい、待て——」

どちらの魔族が言った言葉だったのか分からなかったが、白魔は
最後まで言わず、その炎の塊を二人の魔族に向けて解き放った。

その炎の塊は男の魔族のもとに吸い込まれるように当たり、当た
った場所を基点とするように球体状に辺りの空間を侵食していく。

侵食スピードは凄まじく、隣にいた女の魔族が逃れることも出来
ずに侵食された。

やがて、炎は雨によって鎮火された。

その場所には、ただただ白魔だけが静かに佇んでいた。

空気の勇者

「ん？あれは……」

燦々と太陽が輝く中、魔王は何となく魔王城の頂きで日向ぼっこしていた。

すると、遠くの方に何かの軍勢が現れた。よく見てみると、その軍勢は人間たちのようで、その先頭にはあのメンドクサイ勇者が見てとれた。どうやら勇者が軍勢を率いているらしい。

「またメンドクサイ奴が来たよ……」

魔王としては、勇者のことを五月蠅くてメンドクサイ奴だと認識しており、まあそれは、あながち間違いでは無いことはすでに以前勇者が魔王城に訪れた際に証明されている。

今回、勇者が率いてきた軍勢は見たところ一万に及ぶ数ではないだろうか？

魔王は、よくあんな勇者に付き従うものだと、ある意味その軍勢に対して感心していた。

「よし、とりあえず、白魔を呼んでこよう」

十数秒後。

「……何の用だ？」

白魔は少タイライラしていた。それもその筈、魔王がいきなり目

の前に現れたと思ったら、急に白魔の腕を掴んでここまで連れてきたのだ。

魔王は白魔の迷惑そうな視線にも動じず、端的に要件を示す。

「あれ、片付けといて」

そう言いながら魔王が指差したのは、まだ遠くの方に見える一万ほどの人間の軍勢。

その軍勢を見て、白魔はやっと自分の力を奮えると、内心喜んだ。

「……任せろ」

「おう、任せた」

白魔は、まず自身の魔力を圧縮して弓矢を造り出した。さながら魔力弓と言っべきだろう。

次に手には矢を持たず、そのまま魔力弓の弦を引き絞ると、いつの間にかその手にはまるで全てを焼き尽くすマグマのような赤色の矢が現れた。

そして射る。

まだまだ小さくしか見えない筈の一万の軍勢にその矢は届き、あまつさえ百人規模で人間を焼き殺した。

それだけでは白魔の手を止まらず、何度も何度も魔力弓を引き絞り、矢を放った。その矢は赤を始め、黄や青など、白魔が魔力弓を引き絞る度に色とりどりの色に変化した。

それを白魔が三十分ほど続ける頃には一万の軍勢はほぼ壊滅状態にあった。

「……終わったぞ」

白魔の表情は何かをやり終えたような清々しく晴れやかな感じだった。

「ん、お疲れ。もう休んで良いぞ」

「そつえばさ……」

時は夕食時。魔王城ではいつも通り、皆で夕飯を食べていると、魔王は唐突に口を開いた。

「今日、あのメンドクサイ勇者がすぐそこまで来てたんだよ」

「え！？本当ですか、魔王様っ！」

そう反応したのはメイドだった。メイドは以前、そのメンドクサイ勇者一行のメンバーだったので、驚きが隠せなかったのだろう。まあもつとも、すでにメイドには勇者に対して何の思い入れが無くなっているのだが。

「ああ、そんな気配もありましたね。凄く遠くの場所でききなり気

配が消えたので放置していましたが」

姫が事もなさに言う。その言葉を聞き、魔王としては『何で早く報告しないんだよ!』と言いたかったが、特に必要が無かったので黙っておくことにした。

「それは本当ですか、魔王様?でしたら、私に言っただけなら、すぐさま排除しに行きましたのに」

「安心しろ、黒騎士。そいつらは白魔が薙ぎ払ったから。次、こういうことがあったら、黒騎士に頼むことにするから覚悟しとけよ」

「はい、いつでも出撃出来るようにしておきます」

本当に黒騎士は真面目な奴だ。そう思った魔王は、今回の功労者である白魔を見る。

やはり黙って食事を口に運ぶだけだ。

(もう少し、喋っても良いと思うんだけどな……)

そして最後に白魔と同じく黙々と食事を口に運んでいる青隸を見る。

青隸は、この件はどうでも良いみたいだな。もともと、この場所で青隸が口を開くとしたら、魔王が強要させた食事の開始と終わりの挨拶だけなのだが。

今日も魔王城は慌ただしくも平和だった。

空気の勇者（後書き）

お久しぶりです。

そして、またもやしばらく放置するかも。。。

魔王の暇潰し

「暇だ……」

いつものごとく魔を統べる王にのみ座することを許された魔王城にただ一つ存在する王座に腰掛け魔王は呟いた。

退屈。

その単語は魔王にとっては忌むべき言葉だ。

さて、皆さんも思い出して頂きたい。魔王は元勇者だ。魔王を召喚した国に住まう人々は自分達のために勇者を召喚したと思っているが、魔王としては神と前魔王の命を狩る事を代償に退屈から解放され魔王討伐という生きる目的を得るという契約を交わしたのだ。

それでは今の現状はどうだろう？

魔王は勇者として召喚され、そして前魔王を討ち滅ぼした。

結果として、自身が次代の魔王として君臨する嵌めとなったが、一応は神との契約は果たした。

しかし、そこで問題が発生した。前魔王を討ち滅ぼした事により魔王の生きる目的が無くなってしまったのだ。当初は、新たな魔王として退屈な日々を送る筈は無いだろうと魔王は樂觀していたのだが、現状として『暇だ……』と呟いてしまうほど退屈だった。

「ああ、面白い事ないかなあ」

魔王のその言葉は魔王以外誰も存在しない魔王の間に寂しく響き渡る。

この場に姫でも居てくれたのなら、魔王は彼女と小言を言い合つて暇潰しも出来ただろうが、姫はメイドの調教に忙しいので、無い物ねだりは出来ない。

やることも無いので、魔王の間を見渡す。

いつもと変わらない整然とした雰囲気が漂う如何にも魔王が居ますよと教えてくれそうな部屋だ。相変わらず姫が魔王がよくこの部屋でブーツとしているという理由で綺麗に掃除をしてくれているので埃一つすら無い。

魔王はこの魔王の間というキーワードで思い出す。魔王とメイドが初めて対面したのはこの場所だった。メイドは元々どこかの国の勇者一行の一人で、姫が雑用が欲しいといった理由で魔王軍に入っただのだ。

その事を思い出して魔王は苦笑する。端から見たら他に誰も居ない部屋で笑い出した変な奴だが気にしないことにしよう。

「そう言えば、あの時もブーツとしてたらいつの間にか勇者達が自滅してたな」

あの時の事は魔王自身はよく憶えていないが、魔王がブーツとしている間に勇者一行がやって来て、魔王は気付かぬうちに怒涛の攻撃の雨を浴びせられていたが、魔王はそれすら気づかなかったのだ。そして気づけば王座の周辺は勇者一行の攻撃でスタボロにされていたわけだが、今はその痕跡すら見る事が叶わないくらいに姫の手によって修復されていた。ホントに姫様様である。

まあ、魔王としては別に修復されなくても良かったわけであるが。

過去の出来事を思い出して軽い暇潰しをしていたわけだが、魔王はその行為自体を面倒臭いと思ってしまったので、過去を思い返す

のは終了する。

「暇……ひま、暇暇ひま」

これほどまでに暇を連呼するならば、この魔王の間から出て暇潰しをすれば良いのだが、歩く事すら面倒臭いと思ってしまう魔王にはその言葉は無意味だ。

「さてどうしよう……。何か時間を忘れて考えに耽る事が出来るテーマはないだろうか……？」

独り言すら何か可哀想に思えてしまうのは魔王のデフォだ。他にやる事が無い、もといやろうとすら思わないので、面倒臭いが過去の出来事から暇潰しに使えるテーマを探すことにする。

「そついや、黒騎士と一緒にどっかの自分本位の国王ブツ殺したな」

それは二、三カ月前の事だった。

「それで青隼を貰ってきたんだっただな」

あの時、黒騎士と闘った騎士隊長は人間にしては強かった。おそらくは絶え間無い努力をしたのだろう。それで無くては、血筋以外で人間は魔力を運用する事は出来ない。

「羨ましい……」

魔王は努力をする事が無い。

寧ろ努力する事が出来ないと言った方が良さだろう。それは魔王自身の性格が面倒臭がりなところもあるが、それよりも魔王が努力

をするまでも無く、何でも出来た事が大きいだろう。

人によつては、努力しないで何でも出来る事を羨ましいと思うかもしれないが、逆に魔王は努力という行為が出来なくて退屈で退屈でしようがないのだ。

「あの魔力剣を生成するために努力したんだろうな……」

……。

「あつ！？魔力剣で思い出したが、黒騎士が造り出した日本刀みたいな魔力剣に銘を与えてやるって言ったまま忘れてた！」

本当に魔王はどうしようも無いくらいに物忘れが激しい駄目な人間だった。

このまま自身の胸の中にこの事をしまいこんで自分の失態を亡きモノにしようかと一瞬魔王の頭に過つたが、これは丁度良い暇潰しではないかと気づき、真剣に考える事にした。

「いかずちらいじん 雷・雷刃・かんなり 雷鳴・らいか 雷火・らいでん 雷電」

一先ず、あの魔力剣が雷属性なので、頭の中にあつた雷についての単語を捻り出してみた。

「ん……？これだと、黒騎士が他の属性を使えるようになったら、何かカツコ悪いな」

別に黒騎士が他の属性を使えるようになったら、その度に銘を考えれば良いのだが、魔王はそんな事に気づく事は無かった。

「じゃあ、虎徹や村正なんかは……うん、痛いな」

その後も様々な候補が挙がるも、全て痛いという理由で脳内で却下していき、だいたい一時間くらいは考えていた。

「うーん……。ここは安直に魔刀、雷で良いかな。これなら他属性を使えるようになって、魔刀、焰や魔刀、凍なんかに出来るしな」

魔王は名案とばかりにポンと手を叩く。実際問題、名案なのかはさて置き、魔刀とはなかなかにおざなりな銘だが、この際気にしない方向にしよう。

「さて……」

魔王は徐に王座から立ち上がる。

「銘も決まった事だし、今日の晩飯のメニューでも食堂まで確認しに行きましょうかね」

時は夕暮れ。

今日も魔王はお腹を鳴らしながら魔王城の廊下を歩くのだった。

テンションの可笑しい一日

「ま、魔王様大変です！」

いつもと変わらない陽射しの良い午後的一幕、メイドが血相をかいて王座でボーっとしていた魔王のもとにやって来た。

なにやらメイドの水色の綺麗な髪は何者かと争ったかのように乱れており、余程の緊急事態なのかもしれない。

「どうかしたか？」

そんな焦ったようなメイドに対して、魔王はどこまでもマイペースだった。

「どうしたもこうしたありません！　魔王様のためにつて、黒騎士さんが料理をしているんですっ！」

「ん？　それがどうしたんだ……？　むしろ俺としては嬉しい限りなんだがな」

魔王としてはそのどこが大変なのが理解出来なかった。むしろ自身の臣下が自分のために料理を振舞うという行為自体は何ら問題ない筈だ。

だがまあ、今の時間帯からしてその黒騎士特製料理が晩飯になるだろうから、姫の万人の舌を呻らせるような料理が食べられないのは少々残念に魔王は思っていた。

「だ、ダメなんです！　ワタシは調理の様子を最初から見ているしだが、とてもでは無いですが、アレは生物が食べられるようなモノ

ではありませんよ！」

「どういうことだ？」

さすがの魔王もメイドの切羽詰まったような様子に若干の危機感を憶えたようだ。

「こう何て表現したらいいのか、シチューを作っているみたいなんですけど、紫色であり緑色であるような様な感じでどう見ても毒物にしか見えないんですよ！」

自分で言っていて恐怖したのかメイドはわんわん泣きだし始めてしまった。

「大丈夫、大丈夫。俺がなんとかしてやるから……」

魔王は泣きだしたメイドの頭を撫でながら泣き止むように言い聞かせる。

（そんなにヤバイモノなのか……？）

ここに来て魔王は焦り始める。先ほどまではちよつと不味い料理という認識で、食べられない事は無いだろうと樂觀視していたが、そこそこの料理の上達してきているメイドが泣いて嫌がる黒騎士の料理に対して恐怖がふつつと沸き始めた。

「とりあえず、様子を見に行くとするか」

このままここに居続けてもメイドが泣いている原因は排除されないし、件のシチューを自身の目で確かめなければ何ともし難かった

ので魔王は一路食堂へと歩を進める事とした。
むろんの事、御供としてメイド（涙目状態）を伴ってた。

「アレか……」

魔王達が食堂に到着し、厨房を覗きこむと黒騎士がまるで毒を作る老婆がニヤニヤしながら釜をかき回す様におたまで鍋の中身をかき混ぜていた。

「……うわぁ」

思わず声が零れてしまう魔王。

「（ししし静かにしてくださいよ！）」

メイドはそんな魔王に対して器用に小声で怒鳴る。
ここでおさらいしておこう。メイドは魔王の部下。つまりはこの行為は不敬に当たる。

まあ、きつとメイドはあまりの恐怖に気が動転しているだけだろうし、魔王もそんな事一切気にしないだろう。

「（一先ず退却だ。引くぞ！）」

「（は、はい！）」

魔王達はそろりそろりと食堂を後にし、魔王の間に戻って来た。

「どうでしょう……」

消え行きそうなメイドのか細い声。

無理も無い。先ほどの光景を目の当たりにしたらもともと気の弱かったメイドが畏縮してしまうのも頷ける。それに魔王も若干だが恐怖を感じてしまうほどだった。

「ホント、どうすっかなー」

王座に深く腰掛け、一番楽な体勢の状態になった魔王が諦めムードただような発言をする。

この場にいる二人してテンション最悪の状態だった。

しばらくの間二人であーだこーだ状況を打開する策を考えてみたが、どうも頭脳派では無い二人には良い策というモノが思いつかなかった。

時刻は既に夕暮れで、もうすぐ晚餐の時間である。

「やはり諦めるしかないんじゃないか？」

魔王は何か達観してしまったかのように眼が死んでいた。

「そうですね」

メイドも同様に眼が死んでいる。

「「はあ……」」

溜め息のシンクロ。

魔王は思った。何かがシンクロしてここまで嬉しくないのは溜め息だけなんだろうなと。

かくして二人の勇者は戦場へと赴くのであった。

「アンタ達、何してんの？」

戦場という名の食堂に入ると二人は呆然としてしまった。そんな様子に対し、最近食堂でも喋るようになってきた青隸が訊ねてきた。

「し、シチューが……」

メイドが言葉を漏らす。

「そうね。シチューよ。それがどうかした？」

「いや、だからシチューが白い……です」

「そんな事は当り前じゃない。確かにビーフシチューは黒茶色だけど、コレはどう見てもホワイトシチューよ」

その言葉を聞き、メイドの目尻から涙が溢れてくる。

「何か良く分かりませんが、ワタシたちの生命の危機は回避されたようですよ、魔王様！」

魔王に勢い良く抱きつくメイド。

「あ、ああ」

魔王も意識を回復させたようで言葉を漏らしながらメイドを抱きしめる。

「やりました！ やりましたよ、魔王様〜！！」

傍から見たら全くもって意味不明な行動をする二人。現に青隸が二人に冷ややかな視線を送っている。

「さあ、今日も楽しく晩飯だー！！」

魔王の雄たけびのような声が魔王城に木霊する。

「はい、楽しく美味しくご飯を食べましょう！」

追随するようにメイドも喜びを露わにする。

誰から見てもこの時の二人のテンションは可笑しい。

「そんなに騒いでどうしたのでしょうか？」

魔王とメイドが互いに抱き合って開放感を享受していると、そんな彼らの騒ぎ声を聞いたのか姫が濡れた手を布巾で拭きながら厨房から出てきた。

「聞いてください！ シチューが真っ白なんです！」

メイドは魔王から離れ、姫に満面の笑顔で言う。やはりテンションは可笑的い。

「黙りなさい」

そんな嬉しさマックスなメイドに対して、姫は無情にも頭に手刀をくらわせる。

「いたあゝいつ」

メイドはあまりの痛みに頭を抱えて蹲る。そんなメイドを横目に見つつ姫は魔王に向き直る。

「これはどういう事ですか？」

冷淡な声。相手が魔王で無ければ失禁したに違いない。現に近くにいる青隸は名の通り自身の髪の色と同じく顔を真っ青にしていた。完全なとばっちりである。

「どうもこうもシチューが真っ白なんだよ」

魔王も先ほどのメイドのように笑みを浮かべ姫に言う。何度も言うがコイツもテンションが可笑的いのである。

「メイドに続き、魔王様までですか……」

姫はやれやれと額に手を当てる。

「それに黒騎士さんもあんなモノを作っていたし、明日は槍でも降ってくるのではないだろうか？」

その姫の眩きを聞いたのは黙って食卓の席についていた白魔だけだった。

魔王とメイドはアレ状態だし、青隸は顔面を真っ青にしているし、件の黒騎士は数刻前に姫に折檻されて今はグロッキーだ。そしてそんな彼らの相手をした姫は疲れ果てている。

今この魔王城で正常なのは白魔だけだった。

そんな魔王城の一日。

黒騎士のストレス発散術

既に前日にフラグは立っていた。

しかもそのフラグを立てたのは、なんと完璧超人である姫の一言だというのが驚かれる。

『——明日は槍でも降ってくるのではないのでしょうか？』

魔王のテンションが可笑しく無く、魔王がその一言を聞きとれていたとしたらきつと彼はこう言葉を漏らすだろう。「何してくれんだよ……」と。

なぜなら魔王はこの世界の住人ではないから。そして元オタク（？）……かどうかは別にして二次元の世界にのめり込んでいたからだ。そんな彼はフラグに関してはこの世界において人一倍敏感なのだ。

まあ……聞きとれていなかったたのでそれはもう意味をなさない情報なのだが。

とりあえずそんな前置きは置いておいて、今の状況をお伝えしよう。

（私はなぜこのようなことをさせられているのでしょうか？）

「良いか、まず俺が言いたいのは如何にフラグというモノが扱いづらいかということだ。そもそも話の流れ的にポロつと口から零れてしまうかもしれない。しかしだからといって我々は注意を怠^{おこた}ってはならない。死亡フラグが蔓延するこの世界において俺はお前たちを死なせた^くはない。だから俺は仲間のためならどんな事をする覚悟がある。だけど、いくら最強の俺だとしてもフラグだけには勝てん

のだよ。それはもはや神の意志といっても良い。良いか、とにかく俺は――」

魔王が姫に説教中である。昨日の時点では姫が黒騎士やメイドに對して説教をする立場だったが、今日の姫は説教をされる側だった。地べたに正座させられ説教を甘んじて受けている姫だったが、彼女は全くもって説教されている理由が理解出来なかった。これが世界においてのカルチャーギャップなのだろう。

戦いの火ぶたが切って落とされたのは、姫がフラグを立てたように数えきれないほど無数の槍がこの魔王城に降り注いだことから始まった。

いつもならそんな状況になる前に姫が気付くモノのだが、今回の敵さんはかなり良い魔道具を使っていたらしく気配を完全に消し去っていた。それも大軍といっても良いほどの人数をだ。

「ハーツハーツハーツ――！」

そんな中、楽しそうに叫ぶのは黒騎士の姿があった。

現在黒騎士は、魔王城の城門の前に陣取りやってくる襲撃者の軍勢を迎撃していた。その軍勢を纏めているのはアホな勇者なのは言うまでもないかもしれないが、一先ず伝えておくことにしよう。

黒騎士は右手に掴んだ西洋剣を一振りすることに笑みを零す。

（楽しい……楽しいっ！）

未だ集団戦をする上で、魔力剣の維持時間に難がある黒騎士は以前使用していた西洋剣に電気属性の魔力を付加させて、戦闘時間を伸ばしている。

しかも日頃の姫からの説教によってストレスの溜まっている黒騎士は、それを晴らす様に襲撃者に対して容赦ない攻撃をくらわせている。

まさに黒の死神。

徐々に襲撃者たちはその姿に恐れをなし動きが緩慢になって行った。

「どうしたどうしたー！　せっかく俺様が魔道具を使ってやってるつてのに貴様らの力はこんなもんなのか？」

黒騎士が襲撃者達の山を積み上げていると、人をかき分けるように襲撃者達の奥から一人の男が出てきた。

「ハッ、テメエなんて勇者である俺様が倒してなんよ！」

大方の予想通り出てきた男は空気であることで有名な勇者だった。黒騎士はその姿を確認すると、先ほどまでのストレス発散していた姿が嘘のように目を細め勇者を睨みつける。

「あなたが勇者ですか」

気が弱いモノが聞いたら気絶してしまうだろう低い声。勇者を睨む黒騎士はどこまでも非常な表情をしていた。

「ああ、そうだぜ。もしかしてイケメンの俺様に惚れちまったか？」

「馬鹿言え。貴様の顔など魔王様の美しい造形美をした御顔に比べ

たら月とスッポンほど違う」

「そうかそうか。じゃあ——死ねッ！」

勇者はその言葉とともに腰に差した剣を抜き黒騎士に斬りかかった。黒騎士はそれを西洋剣を使って受け止める。鏖迫り合いの状況だ。

「近くで見たら良い女じゃねえか。どうだ、魔王なんて見捨てて俺のところに来ないか？」

「ぬかせっ！」

力任せに黒騎士が西洋剣を振り切ると勇者はそれに合わせるように後ろに飛ぶ。

黒騎士がその動きに内心驚く。彼女が魔王や姫から聞いていた勇者はとにかく雑魚いというものだった。

しかし良く考えてもらいたい。魔王や姫が雑魚だと思っけてもそれは他の人間からしたら本当に雑魚なのかと？

それはありえない。魔王や姫が強すぎるのだ。だから黒騎士は勇者に対し完全になめ切っていた。

（これは気を引き締めないといけませんね）

黒騎士は勇者を強敵として認識し直すと西洋剣に付加させていた雷属性の魔力を強める。

脚に力を溜め一気に勇者に詰め寄る。

「ほらよっ」

勇者は正面から突っ込んできた黒騎士に横薙ぎに一線。しかしそれを予期していた黒騎士にかわされる。

「なかなかやるじゃねえか」

「あなたなんぞに褒められても嬉しくありません」

「はあ、つれねえなあ」

互いに会話しながらも激しい攻防を繰り返している。周りに居る襲撃者たちはその姿にすら視線が追いつけず、どうしたもんかと両者を見守っていた。

……が、その均衡は次に瞬間崩れる。

「世界を包み込むのは神の仕事。人を包み込むのは王の仕事。自己を包み込むのは自分の仕事。他者を包み込むのは私の仕事——」

それは呪文だった。勇者にとっては二度目になるその魔法。勇者は呪文を唱えるモノの姿を城門の上で見つけると叫ぶ。

「アレスッ！ 貴様何してんのか分かってんのか！」

そう、呪文を唱えていたのはメイドだった。勇者を見つめるその瞳には怒りの感情しかない。

やがて呪文が終わるとメイドが喋り出す。

「わかってます。ワタシは魔王様の命で勇者を排除しに来ました」

「アレス、お前……」

「ワタシをその名で呼ぶのは止めてください！　ワタシは魔王軍のメイドですっ！」

カ一杯メイドは声を張り上げる。

そして……メイドは姫に教えてもらった魔法の名を告げる。彼女にとっては勇者と別れられた魔法、そして魔王と出会えた魔法である。

「テレポートっ！」

その一言とともに勇者はもとより辺りにいる数えきれないほどの襲撃者たちはどこかへ消えてしまった。

因みにだが、その時もまだ姫に対する魔王の説教は続いている。そして、久しぶりの戦闘を邪魔された形になった黒騎士がメイドに対してお仕置きをしたのは言うまでもないことかもしれない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3375k/>

いつの間にか魔王様

2011年5月14日09時28分発行